

旭・小島古墳群 XVIII

—杉ノ根地区第1地点の調査—

2020

本庄市教育委員会
岡部 フミ子

序

埼玉県北部にある本庄市は北に群馬県伊勢崎市と接しており、江戸時代には県境を流れる利根川での舟運が盛んとなり、さまざまな物資が集積した豊かな地域でありました。また、陸運では本庄市街中心を通る中山道沿いが本庄宿として繁栄し、物流や文化の交流の拠点として盛行しました。明治期には養蚕業の普及に多大な功績を残した、木村九蔵が競進社模範蚕室を設置した場所としても広く知られています。

本書に報告する旭・小島古墳群は、本庄市のマスコットキャラクターである「はにぼん」のモデルとなった笑う盾持人物埴輪が出土した前の山古墳を有し、4世紀から7世紀にいたるまでの約300年間継続的に古墳が築造された古墳群として知られています。その中でもとくに、今回報告する杉ノ根地区は、埴輪の生産が減少する古墳時代の終末期の古墳が多く立地する地区にあたると考えられています。今回の発掘調査では、平成10年の発掘調査で検出された古墳の葺石の一部と思われる石材やその古墳の周堀が検出され、古墳の規模の大きさを示す資料を得ることができました。

本書は分譲住宅建設に先立って実施した発掘調査の成果をまとめたものでありますが、本庄市の歴史を考えるうえで重要な資料の一つになるものと思われます。また、学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史や遺跡を理解する一助として、多くの皆様にひろくご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、現地の発掘調査から整理・報告書の刊行にあたり、本市の文化財保護に多大なるご協力を賜った岡部フミ子様、株式会社光徳様及び、関係諸機関並びに地元関係者の皆様に対しまして、心からお礼を申し上げます。

令和2年3月

本庄市教育委員会
教育長 勝山 勉

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市下野堂3丁目22番に所在する旭・小島古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は分譲住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、令和元年度に実施した。
3. 発掘調査は岡部フミ子氏の委託を受けて本庄市教育委員会が実施し、的野善行と松本完が担当した。現地調査は株式会社測研の高林真人が専従し、和田祐作が補佐した。
4. 発掘調査から報告書作成・刊行に至る経費は、岡部フミ子氏が負担した。
5. 発掘調査面積は880㎡である。
6. 発掘調査期間および整理期間は以下のとおりである。
発掘調査 自 令和元年10月1日 至 令和元年11月7日
整理作業 自 令和元年11月2日 至 令和2年3月24日
7. 整理調査及び発掘調査報告書刊行は、本庄市教育委員会の指導の下、株式会社測研が行った。
8. 本書の執筆は、第1章を本庄市教育委員会文化財保護課、第2章第1節を和田、その他を高林が行い、編集は高林が行った。
9. 出土した遺物及び各種原図・写真などの記録類は本庄市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査及び整理調査・報告書刊行に関する組織は、以下のとおりである。

発掘調査・整理調査・報告書刊行組織（令和元年度）

主体者	本庄市教育委員会	教 育 長	勝 山 勉
事務局	事務局	長	高 橋 利 征
	文化財保護課	長	佐々木 智恵
	課長補佐兼埋蔵文化財係長		恋 河 内 昭 彦
主 査		主 査	塩 原 浩
主 任		主 任	的 野 善 行
主 補	事 務 補	主 補	水 野 真 那
専 門 員		専 門 員	松 本 完
臨 時 調 査 員		臨 時 調 査 員	中 嶋 淳 子
			高 林 真 人（株式会社測研）

凡 例

- ・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用している。
- ・遺構挿入図に使用した座標値は世界測地系によるものであり、方位記号は座標北を示している。
- ・セクション図に使用した数値(L=)は、標高を表す。
- ・土層注記及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖(1998年版)』を使用した。

- ・遺構には次の略号を使用した。

S K = 土坑 S D = 溝跡 P = ピット(小穴) S X = 性格不明遺構

- ・本報告書では、次の火山噴出物の略号を使用した。

As - B = 浅間 B テフラ

- ・遺構の実測図は、調査区全体を 1/300、古墳の平面図を 1/160・1/200、断面図を 1/80、土坑・溝跡の平面図・断面図を 1/60 で掲載した。
- ・遺物の実測図は復元実測を 1/4、破片実測及び断面実測を 1/3 で掲載した。ただし、石鏃と銭貨は小さいため 1/1 で掲載した。
- ・遺物実測図の割れ口は、輪積み・積み上げ部分で割れていると判断したものは実線で表している。
- ・出土した遺物の注記は、旭・小島 杉ノ根 第1・遺構名・出土層位などを記入した。
- ・本報告書で使用した地図は下記の通りである。

○国土地理院 地形図「本庄」・「伊勢崎」 1/25,000

○本庄市都市計画図 2・6 1/2,500

- ・遺物実測図に使用したトーンは以下のとおりである。

稲葉範囲  須恵器断面 

目次

序	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の位置と周辺の地形	2
第2節 周辺の遺跡	3
第3章 調査方法と調査の経過	3
第1節 調査方法	3
第2節 調査の経過	5
第4章 旭・小島古墳群の概要	5
第1節 旭・小島古墳群の概要	5
第2節 旭・小島古墳群杉ノ根地区の既往の調査	7
第5章 確認された遺構と遺物	7
第1節 遺構の分布と基本土層	7
第2節 古墳	11
第3節 土坑	17
第4節 溝跡	30
第5節 ビット	31
第6節 性格不明遺構	32
第7節 遺構外出土遺物	32
第6章 まとめ	33
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	旭・小島古墳群古墳分布図（調査地点周辺）	4
第3図	調査地点位置図	6
第4図	調査地点全体図（杉ノ根1号墳A～E地点含む）	8
第5図	杉ノ根1号墳全体図	9・10
第6図	杉ノ根1号墳出土遺物実測図	11
第7図	杉ノ根1号墳平面図・断面図①	12
第8図	杉ノ根1号墳断面図②	13
第9図	杉ノ根11号墳平面図・断面図、出土遺物実測図	14
第10図	杉ノ根12号墳出土遺物実測図	15
第11図	杉ノ根12号墳平面図・断面図①	16
第12図	杉ノ根12号墳断面図②	17
第13図	1・4～10号土坑平面図・断面図	18
第14図	2・3号土坑平面図・断面図	19
第15図	11～17・23～26号土坑平面図・断面図	23
第16図	18～22号土坑平面図	24
第17図	18～22号土坑断面図	25
第18図	27～33号土坑平面図・断面図	28
第19図	土坑出土遺物実測図	29
第20図	1・2号溝跡平面図・断面図、1号溝跡出土遺物実測図	31
第21図	1号性格不明遺構平面図・断面図	32
第22図	遺構外出土遺物実測図	32

挿表目次

第1表	旭・小島古墳群杉ノ根地区既往の調査概要	6
第2表	出土土器・陶磁器観察表	34
第3表	出土埴輪観察表	35
第4表	出土鉄製品観察表	35
第5表	出土石製品観察表	35

写真図版目次

- 図版1 調査地点全景
調査地点全景 東から
- 図版2 杉ノ根1号墳周堀土層断面CC'
南東から
杉ノ根1号墳周堀全景 東から
杉ノ根1号墳周堀全景 北から
杉ノ根11号墳周堀土層断面AA' 南から
杉ノ根11号墳全景 北から
杉ノ根12号墳周堀・SK32土層断面AA'
北西から
杉ノ根12号墳周堀全景 北東から
杉ノ根12号墳周堀全景 南西から
- 図版3 杉ノ根12号墳周堀遺物出土状況
南東から
杉ノ根12号墳周堀遺物出土状況
北西から
SK1礫出土状況 南から
SK1人骨出土状況 南から
SK1全景 南から
SK2・3全景 北東から
SK4・5全景 南東から
SK6・7全景 北東から
- 図版4 SK8・9全景 北東から
SK10全景 南西から
SK11全景 南西から
SK12全景 南東から
SK13全景 北東から
SK14・15全景 南東から
SK16・17全景 南東から
SK18・19全景 南東から
- 図版5 SK20全景 南東から
SK21全景 北東から
SK22全景 南東から
SK23・24全景 南西から
SK25全景 北西から
SK26全景 北西から
SK27全景 南から
SK28全景 東から
- 図版6 SK29全景 北西から
SK30全景 北西から
SK31全景 東から
SK32全景 東から
SK33全景 北東から
SD1・2全景 南東から
作業風景
作業風景
- 図版7 1・11・12号墳出土遺物写真
- 図版8 12号墳、SK2・3・18・20、SD1、
遺構外出土遺物写真

第1章 発掘調査に至る経緯

株式会社光徳 代表取締役福島哲夫氏(以下、事業者)により本市下野堂三丁目22番の土地(以下、開発予定地)における分譲住宅建設のための工事が計画され、平成31年4月10日付けでこの土地について事業者から本市教育委員会(以下、市教委)に「埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」の照会文書が提出された。市教委は埼玉県埋蔵文化財包蔵地地図と照合したところ、開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「旭・小島古墳群」(県遺跡番号53-171)に該当していることが判明した。

さらに開発予定地周辺での既発掘調査箇所等の資料を確認したところ、開発予定地内には古墳を中心とする埋蔵文化財が所在する可能性が高いことが判明し、市教委は保存計画立案のため令和元年6月4日～6日にかけて試掘調査を実施した。その結果、複数の古墳周堀等の埋蔵文化財が検出され、市教委は事業者と調査結果とともに、検出された開発予定地内の埋蔵文化財については現状保存が望ましいことを伝えた。

市教委と事業者は文化財の保存に関する協議を行ったが、事業遂行にあたって埋蔵文化財の現状保存を行うことが困難であるとの結論に達し、検出された埋蔵文化財についてはやむを得ず記録保存の措置を採ることで合意した。記録保存のための発掘調査は、試掘調査の結果を踏まえ、遺構の検出されなかった東側を除く形で、開発予定地の西側を中心とした範囲に限定する(実施範囲は、本文の報告図を参照)こととなった。

なお、昭和49年～50年に開発予定地の東側で実施された埼玉県遺跡調査会による下野堂遺跡(未報告)の発掘調査で検出された方形を呈すると思われた溝跡は、今回の試掘調査ではその延長部が一切検出されず、何らかの不整形状をとることが明らかになった。

発掘調査は、開発予定地の土地所有者である岡部フミ子氏が委託者、市教委が受託者となり実施されることとなり、令和元年8月26日両者による委託契約を締結し、現地における発掘調査は令和元年10月1日～11月7日に実施された。

法的手続きについては、文化財保護法第93条による「埋蔵文化財発掘の届出」は平成31年4月10日付けで事業者から市教委に提出され、同届出は市教委の意見を副えて令和元年8月26日付け本教文発第186号にて埼玉県教育委員会(以下、県教委)に進達された。これを受けて、県教委は令和元年8月26日付け教文資第4-865号の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」にて工事着手前の発掘調査が必要である旨を事業者へ通知した。また文化財保護法第99条による発掘調査通知は令和元年8月26日付け本教文発第187号にて市教委から県教委に提出された。

出土した文化財についての埋蔵物発見届は令和元年11月12日付け本教文発第251号で市教委より本庄警察署長に提出され、出土文化財保管証が令和元年11月14日付け本教文発第262号にて市教委より県教委に提出された。県教委は令和元年12月16日付け教文資第7-109号にて「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」を土地所有者に通知した。

(本市教育委員会事務局)

第2章 遺跡の位置と環境

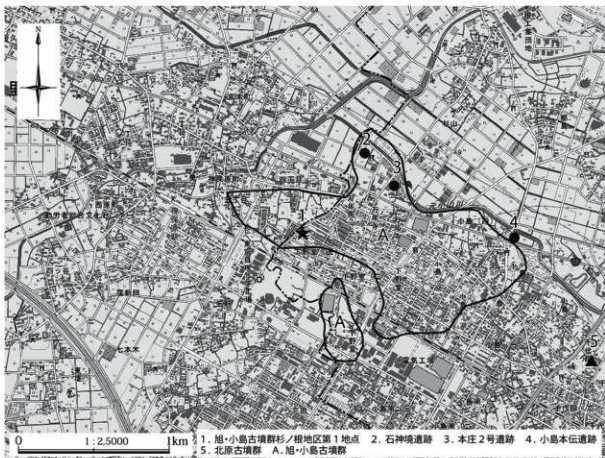
第1節 遺跡の位置と周辺の地形

旭・小島古墳群杉ノ根地区第1地点は、本庄市下野堂に所在する古墳時代後期の古墳が主体となる遺跡である。本遺跡の所在する本庄市は、埼玉県の北西部に位置し、北東—南西方向に細長い形をしており、北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と接している。下野堂は本庄市の北東側の西部に位置し、J R高崎線本庄駅から北西へ約3 km、J R高崎線神保原駅から東へ約800 mの地点にあり、北西部は児玉郡上里町との境をなす。本地点は、下野堂の北西側に位置し、本地点の北東約400 mの所に国道17号が北西—南東方向に走り、北側約2.5 kmに利根川と烏川の合流地点がある。

本庄市の地形は南方に連なる山地、市街地をのせる台地、利根川右岸に広がる低地に大別される。

山地は、群馬県南西部の赤久縄山を中心とする地域と埼玉県北西部の城峯山を主峰とする山地を合わせて上武山地と総称し、南東から北西方向へと展開している。

台地は小山川扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称される。小山川扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、浅見山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、小山川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防上の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。一方、神流川扇状地は群馬県藤岡市浄法寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川や男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。



第1図 遺跡位置図

旭・小島古墳群は、本庄市小島から上里町神保原にかけて、神流川扇状地扇端部に沿う形で広範囲に展開している。本地点は旭・小島古墳群の北西側にあり、本庄台地北端部に立地している。本地点の現況は畑となっており、標高は約60mで概ね平坦である。(和田祐作)

第2節 周辺の遺跡

今回発掘調査を行った地点は、旭・小島古墳群を形成する杉ノ根1・11・12号墳が主体となっている。ここで、本庄市・児玉郡域における古墳の様相を概観したい。

本庄市・児玉郡域は、古墳の分布密度が非常に濃い地域である。本庄市・児玉郡域で最初に築造された古墳は、児玉町下浅見にある鷺山古墳である。4世紀前半頃の築造と推定され、これは埼玉県内でも最古級の前方後方墳である。4世紀後半頃になると、浅見山丘陵の久久保山支丘に前山1号墳、前山2号墳が築造されたと推定される。前山1号墳は、以前は円墳と考えられていたが、平成16～18年に本庄市教育委員会が行った確認調査によって全長70m以上、後円部直径約48mの前方後円墳である可能性が高まった。前山2号墳は、本庄市教育委員会による前山古墳群の2次・3次発掘調査の結果、一辺30m前後の方墳と推定された。立地関係から前山1号墳よりも新しいと推測される。

5世紀前半頃になると、生野山丘陵の最高点に位置する物見塚古墳が築造されたと推測される。5世紀中頃になると児玉町下浅見に金鑽神社古墳、生野山丘陵に生野山将軍塚古墳、本庄市北堀の女堀川右岸に公卿塚古墳が築造される。5世紀前半から直径60mを超える大型古墳が造られるようになり、生野山将軍塚古墳と金鑽神社古墳では段築・葺石が認められる。また、小山川上流の児玉町金屋では、直径30m規模の長沖157号墳が築造された。

5世紀中頃～6世紀初め頃になると、直径60m規模の大型古墳も造られるが、直径30～40m規模の円墳が多数築造された。小山川上流では長沖14号墳、生野山丘陵では生野山9号墳が築造されている。また、古式群集墳もこの段階から形成され、塚合古墳群、旭・小島古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などが造られる。

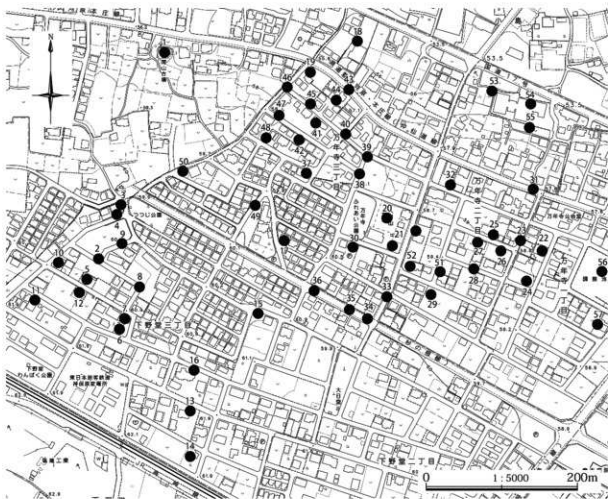
6世紀になると首長墓として前方後円墳が造られるようになる。小山川上流の長沖古墳群では長沖25号墳・31号墳、秋山諏訪山古墳、生野山丘陵では生野山古墳群の生野山饒子塚古墳が40～60m規模の前方後円墳である。

6世紀後半になると横穴式石室を持つ小型円墳が造られるようになり、児玉郡美里町の広木大町古墳群・塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などで見られる。7世紀以降になると首長墓が前方後円墳から大型の円墳に変わり、旭・小島古墳群では児玉郡上里町の浅間山古墳が築造された。646年の薄葬令以後、古墳の築造は下火となっていく。

第3章 調査方法と調査の経過

第1節 調査方法

旭・小島古墳群杉ノ根地区第1地点の発掘調査は、分譲住宅建設に伴い遺構に影響が及ぶ可能性が高い部分において、工事を行う前に実施した記録保存調査である。建設予定範囲は西側が屈曲した東西方向に長い台形状であるが、発掘調査範囲は試掘調査の結果、東側及び南西隅部を除いたT字状を呈することとなった。発掘調査面積は880㎡である。



1. 浅間山古墳 2. 杉ノ根1号墳 3. 杉ノ根2号墳 4. 杉ノ根3号墳 5. 杉ノ根4号墳
6. 杉ノ根5号墳 7. 杉ノ根6号墳 8. 杉ノ根7号墳 9. 杉ノ根8号墳 10. 杉ノ根9号墳
11. 杉ノ根10号墳 12. 下野堂御手長山古墳 13. 屋敷内1号墳 14. 屋敷内2号墳
15. 屋敷内3号墳 16. 屋敷内4号墳 17. 下野堂10号墳 18. 石神境古墳 19. 御嶽塚古墳
20. 万年寺八幡山古墳 21. 万年寺つづじ山古墳 22. 林1号墳 23. 林2号墳 24. 林3号墳
25. 林4号墳 26. 林5号墳 27. 林6号墳 28. 林7号墳 29. 林8号墳 30. 林9号墳
31. 林10号墳 32. 林11号墳 33. 林13号墳 34. 林14号墳 35. 林15号墳 36. 林16号墳
37. 林17号墳 38. 林18号墳 39. 林19号墳 40. 林20号墳 41. 林21号墳 42. 林22号墳
43. 林23号墳 44. 林24号墳 45. 林25号墳 46. 林26号墳 47. 林27号墳 48. 林28号墳
49. 林29号墳 50. 林30号墳 51. 林1号土器棺墓 52. 林2号土器棺墓・林3号土器棺墓
53. 小島北浦1号墳 54. 小島北浦2号墳 55. 小島北浦3号墳 56. 三奈山古墳 57. 森西2号墳

第2図 旭・小島古墳群古墳分布図(調査地点周辺)

発掘調査範囲の現況は畑で、周囲の道路より50～80cm程高い状況であった。表土を除去するとすぐに黄褐色のローム層が検出され、現道路と同じ標高となった。

関東ローム層上面を人力で鋤簾を使用して削り遺構確認作業を行った。その際出土した遺物は確認面を取り上げている。確認された遺構は、これまでに調査された杉ノ根1号墳の周堀の続きはそのまま杉ノ根1号墳とし、新しく確認された2条の古墳周堀は杉ノ根11号墳・12号墳とした。土坑、溝跡、ピット、性格不明遺構は杉ノ根地区第1地点の遺構として1号から付した。

遺構の掘削は、形態・大きさに応じて適宜土層観察ベルトを設定し行ったが、試掘調査トレンチの位置に制約を受けたものがある。遺物の取り上げは、遺構に伴うと判断したもの及び遺存状態の良いものは平面図作成または座標値を測量して取り上げ、その他の遺物は遺構覆土一括で取り上げた。

遺構の記録は、遺構実測図作成及び写真撮影を実施している。遺構実測図はトータルステーションを用いて全体図を 1/200、遺構平面図を 1/40、古墳周堀以外の遺構平面図及び全断面図を 1/20 の縮尺で図化した。写真撮影は、APS-C サイズ以上、約 1800 万画素のデジタルノンレフレックスカメラを使用し、同一カットの露出を変えて 3 枚 1 単位での撮影を基本とした。また、無人航空機 (UAV・ドローン) による空中写真撮影を実施し、遺構写真撮影で使用したものと同一機種のデジタルカメラを使用した。

第 2 節 調査の経過

調査日誌抄

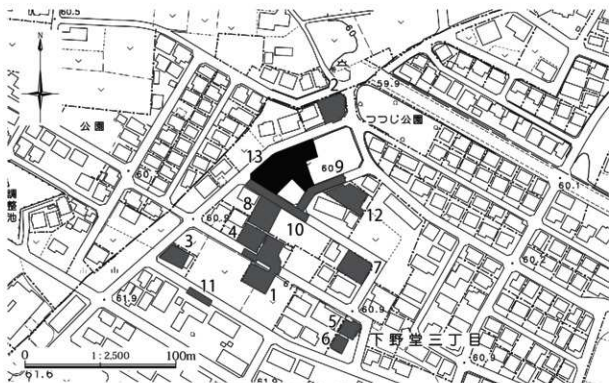
- 令和元年 10 月 1 日 表土掘削を開始。
- 令和元年 10 月 7 日 表土掘削が終了。遺構確認作業を行う。
- 令和元年 10 月 8 日 杉ノ根 1 号墳・杉ノ根 11 号墳の周堀の掘削を開始。
- 令和元年 10 月 9 日 杉ノ根 11 号墳の周堀の掘削が終了。
- 令和元年 10 月 17 日 杉ノ根 1 号墳の周堀の掘削が終了し、調査区西側から土坑・溝跡の半截を開始。
- 令和元年 10 月 23 日 土坑・溝跡の半截が終了し、杉ノ根 12 号墳の周堀と大型土坑の掘削を開始。
- 令和元年 10 月 26 日 杉ノ根 12 号墳周堀、大型土坑の掘削が終了。
- 令和元年 10 月 28 日 土坑・溝跡の完掘作業、古墳周堀の土層観察ベルトの掘削を開始。
- 令和元年 10 月 30 日 空中写真撮影準備作業を行う。
- 令和元年 10 月 31 日 空中写真撮影実施、遺構平面図測量、道具の片付けを行う。
- 令和元年 11 月 1 日 遺構平面図測量、道具片付けを行う。

第 4 章 旭・小島古墳群の概要

第 1 節 旭・小島古墳群の概要

旭・小島古墳群は、本庄台地北端の妻沼低地に面した台地上に立地する。古墳群の分布範囲は、東西約 1.8km、南北約 1.3km の広範囲にわたり、中央に南西―北東方向の埋没谷が存在する。前方後円墳・帆立貝式古墳・円墳・方墳が混成する古墳群で、旭・小島古墳群は埋没谷の東側の近八幡支群・小島支群・蛭子塚支群、西側の万年寺支群、南西側の埋没谷奥の三田支群に分かれており、本調査地点の杉ノ根地区は万年寺支群に含まれる。

旭・小島古墳群における古墳の造成は、4 世紀後半の万年寺支群の方墳が最初と考えられる。万年寺つづじ山古墳 (第 2 図 21、以下第 2 図略)、林 10 号墳 (31)、林 20 号墳 (40) などが該当する。5 世紀前半頃までは本庄・児玉地域では公卿塚古墳や金鑽神社古墳など大型・中型の円墳が見られるが、旭・小島古墳群では確認されていない。また、埴輪の使用も認められない。三田支群の下野堂二子塚古墳は平成 25 年に発掘調査が行われた前方後円墳である。出土した土師器壺及び周堀最下層の放射性炭素年代測定の結果から 4 世紀末～5 世紀初頭頃と想定している。5 世紀後半になると群集墳の築造が始まり、B 種コホケの円筒埴輪が使用される。万年寺支群の三笠山 2 号墳・小島北浦 3 号墳 (55)、小島支群の上前原 5 号墳などが該当する。5 世紀末～6 世紀初頭頃は、万年寺支群で帆立貝式古墳 (三笠山 7 号墳・9 号墳) を中核として周囲に低い墳丘・竅穴を用いた埋葬施設を持つ小規



第3図 調査地点位置図

第1表 旭・小島古墳群杉ノ根地区既往の調査概要

古墳名・地点名	番号	調査期間	概要
杉ノ根1号墳A地点	1	H 2. 10. 01 ～ 10. 22	杉ノ根1号墳の周堀の南側約2/3を確認した。直径30m前後の大型の内墳。E地点で横穴式石室の基礎と思われる雑群が確認された。周堀履上から少量の上跡器片が出土している。古墳時代終末期と考えられる。
杉ノ根1号墳B地点	4	H 4. 05. 13 ～ 05. 29	
杉ノ根1号墳C地点	8	H 10. 08. 17 ～ 09. 10	
杉ノ根1号墳D地点	9	H 10. 09. 01 ～ 09. 30	
杉ノ根1号墳E地点	10	H 11. 09. 01 ～ 09. 30	
杉ノ根2号墳A地点	2	H 3. 05. 21 ～ 05. 30	杉ノ根2号墳の周堀の南西側約1/4を確認した。直径18m前後の内墳と推測される。周堀履上から土師器片5点が出上している。古墳時代終末期と考えられる。
杉ノ根3号墳A地点	2	H 3. 05. 21 ～ 05. 30	杉ノ根3号墳の周堀の北西側の一部を確認した。墳丘の規模は不明。古墳時代後期後半以降と思われる。
杉ノ根4号墳A地点	4	H 4. 05. 13 ～ 05. 29	杉ノ根4号墳の周堀の東側の一部を確認した。直径15～20mの内墳と推測される。古墳時代後期後半以降と思われる。
杉ノ根5号墳A地点	5	H 4. 09. 22 ～ 09. 28	杉ノ根5号墳の周堀の北側約1/2を確認した。直径10m前後の内墳。南西部に周堀の途切れ所がある。周堀履上から土師器片1点が出上した。5世紀中頃～6世紀初めころと考えられる。
杉ノ根5号墳B地点	6	H 4. 09. 22 ～ 09. 28	
杉ノ根6号墳A地点	5	H 4. 09. 22 ～ 09. 28	杉ノ根6号墳の周堀の南西側約1/5と墳丘の一部を確認した。直径10～12mの内墳と推測される。5世紀中頃～後半と思われる。
杉ノ根7号墳A地点	7	H 9. 03. 03 ～ 03. 17	杉ノ根7号墳の周堀の南西側の一部を確認した。墳丘の規模は不明。周堀履上から朝顔形埴輪片・土師器片が出上している。遺物から5世紀中頃～後半と考えられる。
杉ノ根8号墳A地点	9	H 10. 09. 01 ～ 09. 30	杉ノ根8号墳の周堀の北東側一部を除いて確認した。東側・南側に周堀の途切れる部分が見られる。直径11.5mの内墳で、5世紀中頃～後半と思われる。
杉ノ根8号墳B地点	12	H 19. 05. 09 ～ 05. 15	
杉ノ根9号墳A地点	3	H 4. 05. 01 ～ 05. 12	破壊された横穴式石室の残りと思われる列石状の遺構を確認した。
杉ノ根10号墳A地点	11	H 12. 06. 09 ～ 06. 16	杉ノ根10号墳の周堀の北西側の一部が確認された。墳丘の規模は不明。古墳時代後期後半に下る可能性がある。
杉ノ根地区第1地点 (杉ノ根1・11・12号墳)	13	R 1. 10. 01 ～ 11. 07	杉ノ根1号墳の周堀の北側約1/2、杉ノ根11号墳の周堀の東側一部、杉ノ根12号墳の周堀の西側約1/2を確認した。12号墳周堀履上から須恵器片が出土している。いずれの古墳も古墳時代終末期と考えられる。

模な円墳が多数造られ、群集墳の築造を継続している状況が見て取れる。6世紀後半頃になると、近八幡支群・小島支群・蛭子塚支群のある東側で大型円墳が多く築造されるようになる。小島支群の坊主山古墳、山ノ神古墳、前の山古墳、小島御手長山古墳などが該当し、小島御手長山古墳はそれらの中でも最大規模で、角四石安山岩を使った横穴式石室が確認されている。7世紀以降の終末期では、不整形の周堀を巡らす直径10～20m規模の円墳が多数造られるようになり、蛭子塚支群の堂場1～9号墳、三田支群の下野堂開拓1号墳などがある。終末期の有力古墳には方墳を採用する地域も見られるが、旭・小島古墳群では見られない。

第2節 旭・小島古墳群杉ノ根地区の既往の調査

旭・小島古墳群の杉ノ根地区では、これまで平成2～4年、平成9～12年、平成19年にかけて12回16地点で発掘調査が行われている。全て個人住宅建設または区画整理に伴う市道建設に先立って行われた発掘調査である。調査地点は、通し番号が付けられておらず、確認された古墳名とアルファベットAを付し、複数個所で確認された古墳は順次B・C・・・と付けている。今回の発掘調査地点はその状況を改め、新たに杉ノ根地区第1地点と設定された。(第1～3図)

これまで10基の古墳が調査され、今回は杉ノ根1号墳の続きと杉ノ根11号墳・杉ノ根12号墳、土坑、溝跡、ピット、性格不明遺構の調査が行われた。これまでの調査の概要を第1表にまとめている。

第5章 確認された遺構と遺物

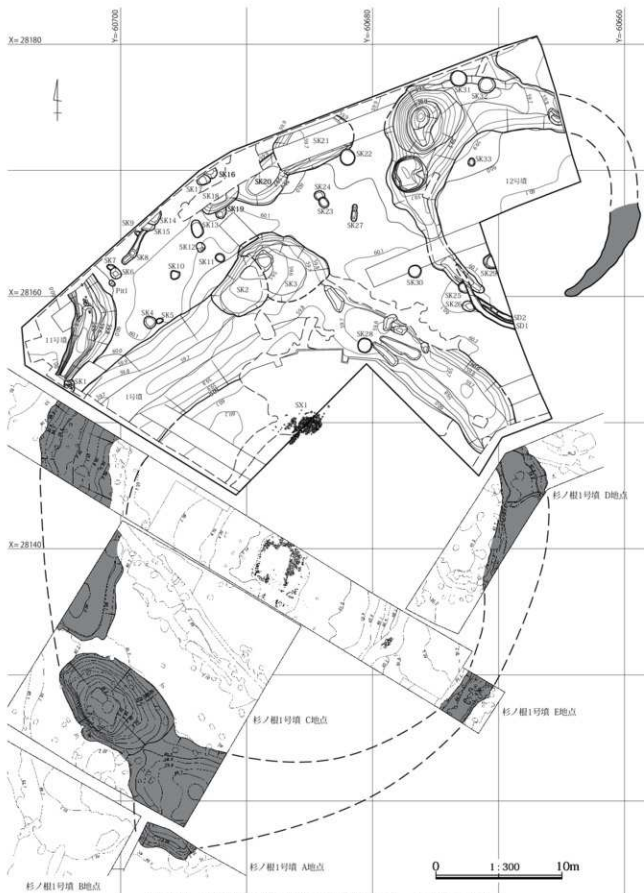
第1節 遺構の分布と基本土層

遺構分布 今回の杉ノ根地区第1地点の発掘調査では、古墳周堀3条(杉ノ根1号・11号・12号墳)、中世の土壇墓1基(SK1)、近世溝跡2条(SD1・2)、性格不明遺構1基(SX1)、時期不明土坑32基(SK2～33)、ピット1基(P1)が確認された。

古墳周堀は、調査区南西部に1条(1号墳)、西端部に1条(11号墳)、東端部に1条(12号墳)が分布している。直径30m前後の1号墳が核となり、11号墳・12号墳がその周囲に造られたものと考えられる。

中世の土壇墓は1基のみが調査区西端部に分布する。近世溝跡2条は北西—南東方向の走向で調査区東端部に分布する。北側はSD1単独であるが、途中から2条に分歧し並走する。性格不明遺構は杉ノ根1号墳の周堀内に分布する。時期不明の土坑・ピットは調査区北側では全域に偏りなく分布しているが、調査区南側では見られない。これは調査区南側が後世のカクランによる削平を受けているため、削平される前は南側にも土坑・ピットが分布していた可能性がある。また、12号墳周堀の内側(SK29・33)や古墳周堀と重複する土坑(SK25・28・31・32)があることから、比較的早い段階で古墳が壊されていた可能性が高いと考えられる。

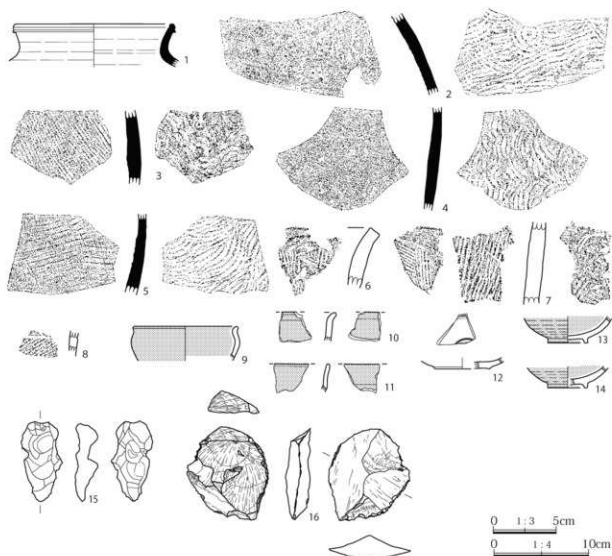
基本土層 杉ノ根地区第1地点の調査前の現況は、畑で周囲を巡る道路よりも高い状態であった。畑の耕作土を含む表土を除去すると直下に黄褐色土の関東ローム層が確認され、関東ローム層上面の遺構確認面は周囲の道路面とほぼ同じ高さとなった。基本土層は、I層の表土が50～80cm程の厚さで堆積し、II層が関東ローム層の黄褐色土で、上面の標高は60.0～60.2mで周囲の道路面とほぼ同じである。



第4図 調査地点全体図(杉ノ根1号墳A～E地点含む)

1号墳全体図 折り込み

1号墳全体図 折り込み



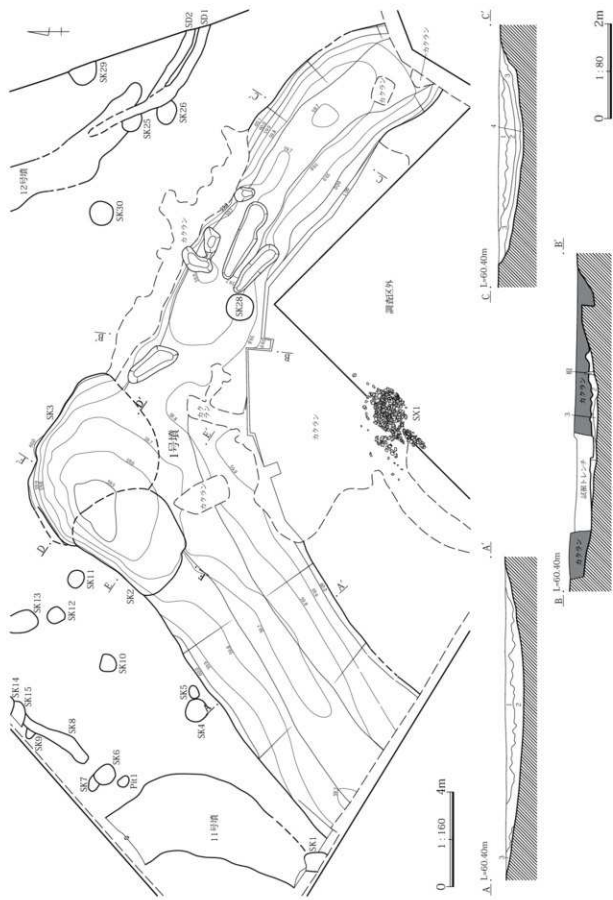
第6図 杉ノ根1号墳出土遺物実測図

第2節 古墳

今回の発掘調査では、これまでの調査で確認されていた杉ノ根1号墳周堀の北側と、新たに杉ノ根11号墳・12号墳の周堀が確認された。

杉ノ根1号墳（第4～8図、第2～5表、図版2・7）

位置 調査区南西部。北西側に11号墳、北東側に12号墳が隣接する。**重複関係** 28号土坑、1号性格不明遺構と重複し、本遺構の方が古い。2・3号土坑は本遺構の方が古いと捉え調査を行ったが、同一遺構の可能性が高い。**遺存状態** 周堀の北側約1/3を確認し、南側は調査区外にある。東側の上部はカクランによる掘削を受けている。**平面形と規模** 過去の調査成果と合わせて、周堀は外周が長軸50m、短軸40mの楕円形を呈し、墳丘裾部径29～30mの円墳である。**周堀** 北側の外周が不整形で、上端幅3.8～6.7m、確認面からの深さ39～46cmを測る。壁面は非常に緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は西側が概ね平坦であるが、東側は凹凸が見られる。覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土・褐色土が堆積する。堆積状況は東側の上層ではカクランを受けているが、自然堆積を示す。**墳丘盛土** 削平されており残存しない。後述する「根切り溝」周

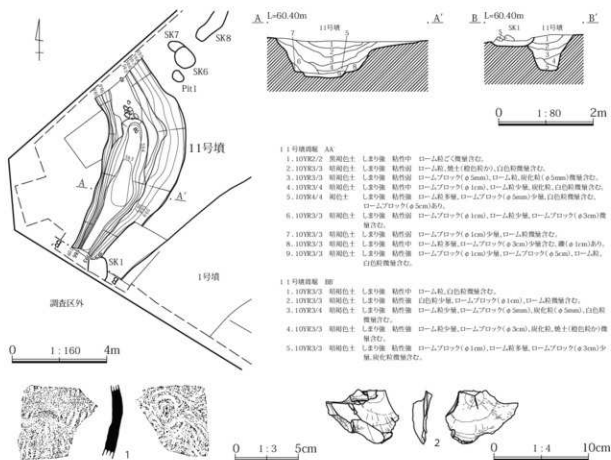


第7図 杉ノ根1号墳平面図・断面図①

帰属時期を判断できる遺物がないが、周堀外周が不整形な状態であることから、古墳時代終末期のものであると思われる。また、周堀の内側に「根切り溝」と考えられる周堀と平行する溝が確認されたことから、近世以降に古墳墳丘を小さく削られていたようである。

杉ノ根 11号墳 (第9図、第2・5表、図版2・7)

位置 調査区西端部。南東側に1号墳が隣接する。**重複関係** 1号土坑と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態** 周堀東側の一部を確認し、大半は調査区外にある。**平面形と規模** 墳丘裾部径15m前後の円墳と推測される。**周堀** 外周が不整形で、幅は中央が広く南側が狭くなっている。平成10年度の杉ノ根1号墳E地点の調査で南側の堀の続きが確認されていないことから、南側に開口部があると考えられる。上端幅1.1～3.5m、確認面からの深さ78～81cmを測る。壁面は南側が急角度で立ち上がり、断面形は葉研状を呈する。中央部から北側にかけては内側が急角度で、外側が緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は北側が一段高くなっている。覆土は暗褐色土が主体で、南端部の上層に黒褐色土が堆積する。堆積状況は自然堆積を示す。**墳丘盛土** 削平されており残存しない。北側中層で少量の礫が固まって出土しており、葎石の可能性が考えられる。**埋葬施設** 確認されていない。**遺物** 土師器、須恵器、石器が出土し、そのうち須恵器1点、剥片1点を図示した。いずれも覆土一括遺物で遺構に伴うものとは言いがたい。**備考** 本遺構は、墳丘裾部径15m前後の円墳と推測され、周堀の状況から南部に開口部があるものと思われる。帰属時期

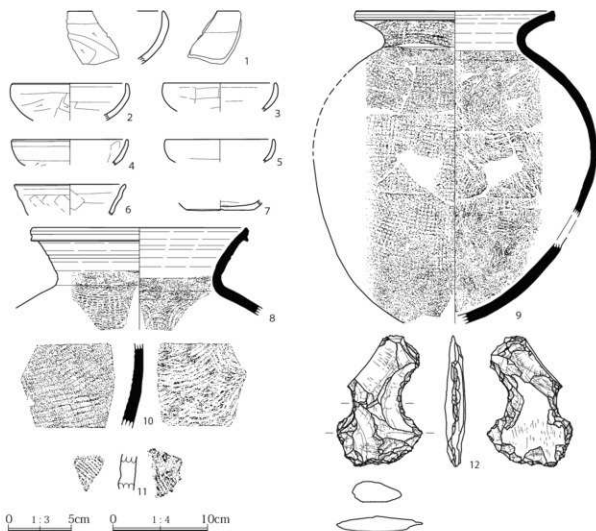


第9図 杉ノ根11号墳平面図・断面図、出土遺物実測図

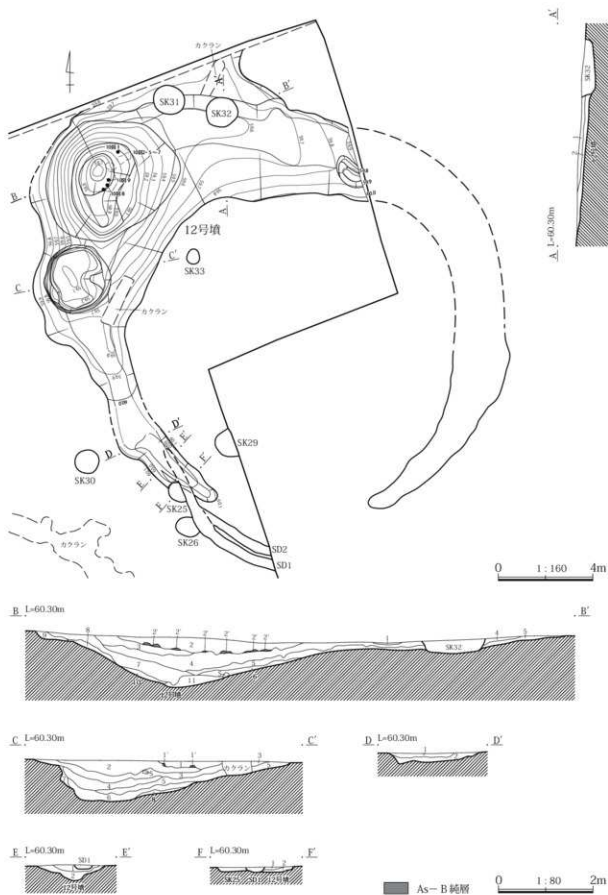
を判断できる遺物がないが、周堀外周が不整形な状態であることから、1号墳同様古墳時代末期のもの可能性がある。

杉ノ根 12号墳（第10～12図、第2・3・5表、図版2・3・7・8）

位置 調査区東端部。南西側に1号墳が隣接する。**重複関係** 25・29・31～33号土坑、1号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態** 周堀の西半分を確認し、東側は調査区外にある。南東部は試掘調査で確認され、範囲のみ記録している。**平面形と規模** 周堀外周径18m前後、墳丘裾部径13～14mを測る円墳である。**周堀** 北西側に挿鉢状と土坑状の落ち込みがあり大きく膨らむため外周が不整形で、北側・北西側の幅が広がっている。南側及び試掘調査で端部が確認されたことから、南側には開口部がある。上端幅0.6～6.4m、確認面からの深さ12～104cmを測る。壁面は南側及び北側が緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。北西側が急角度で立ち上がり、断面形は挿鉢状を呈する。底面は北西側で挿鉢状・土坑状の落ち込みが見られるが、その他は概ね平坦である。覆土は暗褐色土と黒褐色土が互層で堆積し、堆積状況は自然堆積を示す。**墳丘盛土** 削平されており残存しない。**埋葬施設** 確認されていない。**遺物** 土師器、須恵器、埴輪、陶磁器、



第10図 杉ノ根 12号墳出土遺物実測図



第11図 杉ノ根12号墳平面図・断面図①

- 1 2号墳遺構 AA 部
1. 10YK3/3 黒褐色砂質土 しまり強 粘り弱 ローム状、白色粘り層を含む。
 2. 10YK2/2 黒褐色砂質土 しまり強 粘り弱 浅層部粘土層、ローム粘り層を含む。
 3. 10YK2/2 黒褐色土 しまり強 粘り強 粘土層、ローム粘り層を含む。
 4. 10YK2/2 黒褐色土 しまり強 粘り中 ローム粘り層、ロームブロック(φ50mm)粘り層を含む。
 5. 10YK2/2 黒褐色土 しまり強 粘り強 ローム粘り層、ロームブロック(φ100mm)粘り層を含む。
 6. 10YK3/3 黒褐色土 しまり強 粘り強 遺物(須恵器類、下層)を含む層、ロームブロック(φ30cm)層(φ多大あり)。
 7. 10YK3/3 黒褐色土 しまり強 粘り強 ローム粘り層、ロームブロック(φ100mm)粘り層を含む。
 8. 10YK3/3 黒褐色土 しまり強 粘り中 ローム粘り層、白色粘り層を含む。
 9. 10YK3/3 黒褐色土 しまり強 粘り中 ローム粘り層、ロームブロック(φ50mm)粘り層を含む。
 10. 10YK3/3 黒褐色土 しまり強 粘り強 ロームブロック(φ100mm)、ローム粘り、白色粘り層を含む。
 11. 10YK3/3 黒褐色土 しまり強 粘り中 ロームブロック(φ50mm)、白色粘り層、ローム粘り層を含む。
- 1 2号墳遺構 DD
1. 10YK3/1 黒褐色土 しまり強 粘り強 ロームブロック(φ50mm)粘り層、ローム粘り層を含む。
 2. 10YK2/2 黒褐色土 しまり強 粘り中 ローム粘り層、ロームブロック(φ50mm)粘り層を含む。

- 1 2号墳遺構 CC
1. 10YK2/3 黒褐色砂質土 しまり中 粘り性弱 浅層部粘土層、ロームブロック(φ30mm)、白色粘り層を含む。
 1. A-1 砂層。
 2. 10YK2/3 黒褐色土(やや砂質) しまり強 粘り中 10YK3/3黒褐色土ブロック(φ100mm)、10YK3/3黒褐色土粘土層を含む。
 3. 10YK3/3 黒褐色土 しまり中 粘り強 ローム粘り層を含む。遺(φ多大あり)。
 4. 10YK2/3 黒褐色土 しまり強 粘り強 ロームブロック(φ100mm)粘り層を含む。
 5. 10YK3/3 黒褐色土 しまり中 粘り強 ロームブロック(φ100mm)、ローム粘り層を含む。
 6. 10YK2/2 黒褐色土 しまり強 粘り強 ロームブロック(φ30mm)、ローム粘り層を含む。
 7. 10YK2/2 黒褐色土 しまり中 粘り強 ローム粘り層、ロームブロック(φ100mm)粘り層を含む。
 8. 10YK4/4 黒褐色土 しまり強 粘り強 ローム粘り層、ロームブロック(φ30mm)粘り層、白色粘り層を含む。
- 1 2号墳遺構 EE
1. 10YK2/3 黒褐色土 しまり強 粘り中 ローム粘り、黒褐色(φ50mm)、白色粘り層を含む。
 2. 10YK3/2 粘り強土 しまり強 粘り強 ローム粘り層、ロームブロック(φ100mm、30cm)、褐色粘り、白色粘り層を含む。
- 1 2号墳遺構 FF
1. 10YK3/4 黒褐色土 しまり中 粘り中 ローム粘り(φ50cm塊状あり)粘り層、白色粘り層を含む。
 2. 10YK3/3 粘り強土 しまり強 粘り中 ローム粘り層、ロームブロック(φ100mm)粘り層を含む。

第12図 杉ノ根12号墳断面図②

石器が出土し、そのうち土師器7点、須恵器3点、埴輪1点、石器1点を図示した。第10図1～7は土師器環である。器形の特徴から7世紀後半～9世紀のものと思われる。第10図8・9は須恵器甕で、7世紀と考えられる。第10図1・2・4～9は北西側の落ち込み部下層から出土したもので、本遺構の築造完了後間もない時期に近いものと考えられる。備考 本遺構は、周堀外周径18m前後、埴丘裾部径13～14mで南側に周堀開口部を持つ円墳である。周堀外周が不整形であること及び出土土物から、帰属時期は古墳時代終末期と考えられる。

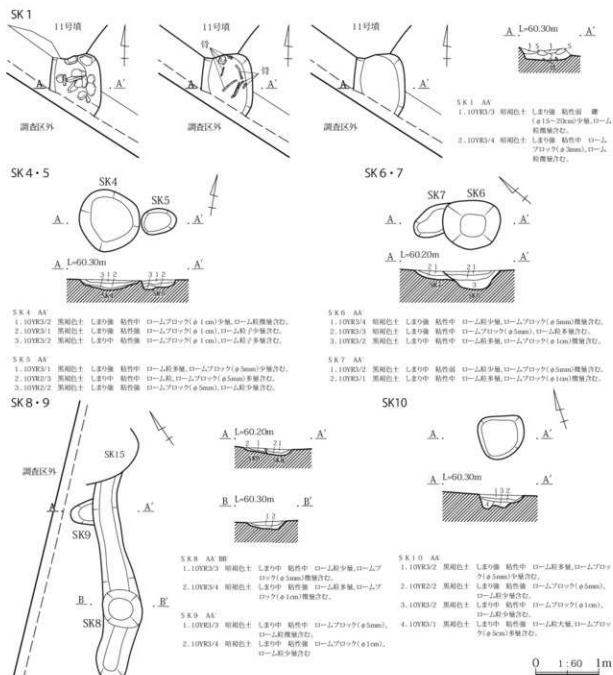
第3節 土坑

1号土坑 (第13図、図版3)

位置 調査区西端部。**重複関係** 杉ノ根11号墳と重複し、本遺構の方が新しい。**遺存状態** 北端部は本土坑の存在に気付かず11号墳周堀と一緒に掘ってしまったため消失し、南西部は調査区外にある。**覆土** 暗褐色土が基調である。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸100cm遺存、短軸81cm、確認面からの深さ20cmを測る。**長軸方位** N-0°-E。**壁面** 緩やかに傾斜して立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 底面から1体の人骨が確認された。埋葬状態は、頭部が北側に位置する西向きの横臥屈葬である。骨の遺存状況は比較的良く、頭蓋骨、左肩甲骨、右上腕骨、右橈骨又は尺骨、脊柱、左右大腿骨、左脛骨又は腓骨、左の足と思われる骨が遺存している。しかし、骨の状態が脆弱だったため取り上げた際に崩れてしまったことから、その計測は図面上で行った。脳頭蓋長(顔から後頭部)13cm、右上腕骨5cm、右橈骨又は尺骨15cm、脊柱25cm、左右大腿骨28～29cm、左脛骨又は腓骨15cm、左の足の骨9cmが遺存し、身長は130cm前後と推測される。上層からはφ15～20cmの礫12個が並べられたように出土していることから、埋葬後に石を集めて塚状にしていたと思われる。遺物が出土していないため時期の特定は困難であるが、埋葬形態及び遺存する骨の状態から中世後半頃の土坑墓と判断した。

2号土坑 (第14・19図、第2・5表、図版3・8)

位置 調査区中央部北側。**重複関係** 1号墳、3号土坑と重複し、本遺構の方が新しいと捉え調査を行ったが、3号土坑とともに1号墳周堀の一部であった可能性が高い。**遺存状態** 概ね良好。**覆土** 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は不整形楕円形を呈する。



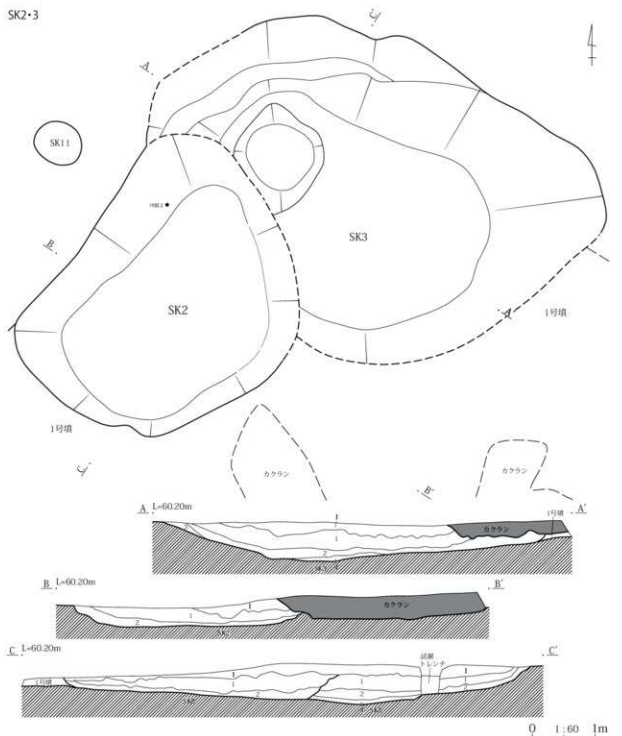
第13図 1・4～10号土坑平面図・断面図

規模は長軸推定594cm、短軸推定418cm、確認面からの深さ28cmを測る。長軸方位 N-22°-E。壁面 緩やかに立ち上がる。底面 北東側へ緩やかに傾斜しているが、概ね平坦である。遺物 土師器、須恵器、石器が出土し、そのうち須恵器1点と打製石斧1点を図示し得た。打製石斧は、本遺構に伴うものではない。備考 土坑と捉えて調査を行ったが、掘り下げた結果1号墳周囲の底面との差が見られず、堆積土にも大きな違いが見られなかった。このことから、本遺構は土坑ではなく、1号墳周囲の外周が不整形に広がった部分であると判断される。

3号土坑 (第14・19図、第2・3表、図版3・8)

位置 調査区中央部北側。重複関係 1号墳、2号土坑と重複し、本遺構は2号土坑より古く1

SK2・3



SK2 BB' CC'

1. 10YR2/3 黒褐色土
 2. 10YR3/3 暗褐色土
 1. 10YR2/3 黒褐色砂性土
- しまり中 粘作層 ロームブロック(φ1cm), ローム粒(φ5mm)塊状
 崩れあがり, 褐色粘層を含む。
 しまり層 粘作中 ローム粒少量, ロームブロック(φ3cm)塊状を含む。
 しまり中 粘作層 浅層A層(10YR3/3)暗褐色土粒(φ3cm)少量,
 ロームブロック(φ3cm), ローム粒(φ10mm)塊状, 褐色粘層(φ5mm)
 塊状を含む。

SK3 AA' CC'

1. 10YR2/3 黒褐色土
 2. 10YR3/3 暗褐色土
 3. 10YR3/4 褐色土
 4. 10YR3/4 暗褐色土
- しまり中 粘作層 褐色粒, 白色粘層, ロームブロック(φ5mm)ごく塊
 状を含む。
 しまり層 粘作中 ローム粒少量, ロームブロック(φ1cm)塊状を含む。
 しまり層 粘作層 ローム粒少量を含む, ロームブロック(φ1cm)あり。
 しまり層 粘作層 ローム粒少量, ロームブロック(φ5mm)塊状を含む。

第14図 2・3号土坑平面図・断面図

号墳よりも新しいと捉え調査を行ったが、2号土坑とともに1号墳周堀の一部であった可能性が高い。**遺存状態** 南西部を2号土坑によって壊されている。**覆土** 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土が堆積し、北西壁際に褐色土が見られる。**平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈する。規模は

長軸 749cm、短軸推定 521cm、確認面からの深さ 60cmを測る。 **長軸方位** N-75°-W。 **壁面** 緩やかに立ち上がる。 **底面** 北西側へ緩やかに傾斜し、北西端部がわずかに低くなる。 **遺物** 土師器、埴輪、剥片が出土し、そのうち土師器1点、埴輪1点を図示し得た。 **備考** 土坑と捉えて調査を行ったが、2号土坑と同様に1号埴輪の底面との差が見られず、堆積土も大きな違いが見られなかった。このことから、本遺構は土坑ではなく、1号埴輪の外周が不整形に広がった部分であると判断される。

4号土坑 (第13図、図版3)

位置 調査区西部。 **重複関係** なし。 **遺存状態** 良好。 **覆土** 黒褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は不整形円形を呈する。規模は98cm×96cm、確認面からの深さ16cmを測る。 **長軸方位** なし。 **壁面** 非常に緩やかに立ち上がる。 **底面** 中央に向かって傾斜する。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

5号土坑 (第13図、図版3)

位置 調査区西部。 **重複関係** なし。 **遺存状態** 良好。 **覆土** 黒褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸56cm、短軸42cm、確認面からの深さ14cmを測る。 **長軸方位** N-82°-E。 **壁面** ほぼ垂直に立ち上がる。 **底面** わずかな凹凸が見られる。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

6号土坑 (第13図、図版3)

位置 調査区西部。 **重複関係** 7号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。 **遺存状態** 良好。 **覆土** 上層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸92cm、短軸78cm、確認面からの深さ29cmを測る。 **長軸方位** N-45°-W。 **壁面** 急角度で立ち上がる。 **底面** 概ね平坦である。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

7号土坑 (第13図、図版3)

位置 調査区西部。 **重複関係** 6号土坑と重複し、本遺構の方が古い。 **遺存状態** 南東端部が6号土坑によって壊されている。 **覆土** 黒褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸71cm遺存、短軸48cm、確認面からの深さ13cmを測る。 **長軸方位** N-86°-W。 **壁面** 緩やかに立ち上がる。 **底面** 概ね平坦である。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

8号土坑 (第13図、図版4)

位置 調査区西部。 **重複関係** 9・15号土坑と重複し、本遺構は15号土坑より古く9号土坑より新しい。 **遺存状態** 北端部が15号土坑によって壊されている。 **覆土** 暗褐色土が堆積する。

平面形と規模 平面形は北東—南西方向に細長い溝状を呈する。規模は長軸 329cm 遺存、短軸 77cm、確認面からの深さ 12cm を測る。**長軸方位** N-33°-E。**壁面** 緩やかに立ち上がる。**底面** 南側に一段低くなるところが見られるが、概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は溝状の細長い形態をしているが、性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

9号土坑（第13図、図版4）

位置 調査区西部。**重複関係** 8号土坑と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態** 東端部が8号土坑によって壊されている。**覆土** 暗褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸 42cm 遺存、短軸 42cm、確認面からの深さ 8cm を測る。**長軸方位** N-68°-W。**壁面** 緩やかに立ち上がる。**底面** 東側に向かって傾斜する。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

10号土坑（第13図、図版4）

位置 調査区西側。**重複関係** なし。**遺存状態** 良好。**覆土** 黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は変型を呈する。規模は長軸 80cm、短軸 75cm、確認面からの深さ 22cm を測る。**長軸方位** N-53°-E。**壁面** 急角度で立ち上がる。**底面** 小さい窪みが見られるが、概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

11号土坑（第15図、図版4）

位置 調査区中央部北側。**重複関係** なし。**遺存状態** 良好。**覆土** 上層は暗褐色土、下層は黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 77cm、短軸 67cm、確認面からの深さ 15cm を測る。**長軸方位** N-60°-W。**壁面** 北—西壁は非常に緩やかに立ち上がり、南—東壁は急激に立ち上がる。**底面** 東側へ傾斜するが、概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

12号土坑（第15図、図版4）

位置 調査区中央部北側。**重複関係** なし。**遺存状態** 良好。**覆土** 黒褐色土と暗褐色土が互層に堆積する。**平面形と規模** 不整形円形を呈する。規模は 72cm×70cm、確認面からの深さ 25cm を測る。**長軸方位** なし。**壁面** 急角度で立ち上がる。**底面** 西側に傾斜するが、概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

13号土坑（第15図、図版4）

位置 調査区中央部北側。**重複関係** なし。**遺存状態** 良好。**覆土** 上層は暗褐色土、下層は黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 128cm、短軸 90cm、

確認面からの深さ 11cmを測る。 **長軸方位** N-10°-W。 **壁面** 非常に緩やかに立ち上がる。
底面 中央に向かって緩やかに傾斜する。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

14号土坑（第15図、図版4）

位置 調査区西部。 **重複関係** 15号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。 **遺存状態** 北西側が調査区外にある。 **覆土** 上層は暗褐色土、下層は黒褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈すると思われる。規模は長軸139cm、短軸51cm遺存、確認面からの深さ14cmを測る。
長軸方位 N-49°-E。 **壁面** 北東側は急角度で、南西側は緩やかに立ち上がる。 **底面** 概ね平坦である。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

15号土坑（第15図、図版4）

位置 調査区西部。 **重複関係** 8・14号土坑と重複し、本遺構は14号土坑より古く8号土坑より新しい。 **遺存状態** 北東部を14号土坑によって壊され、北西側は調査区外にある。 **覆土** 黒褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸102cm遺存、短軸67cm遺存、確認面からの深さ13cmを測る。 **長軸方位** N-44°-W。 **壁面** 緩やかに立ち上がる。 **底面** 概ね平坦である。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

16号土坑（第15図、図版4）

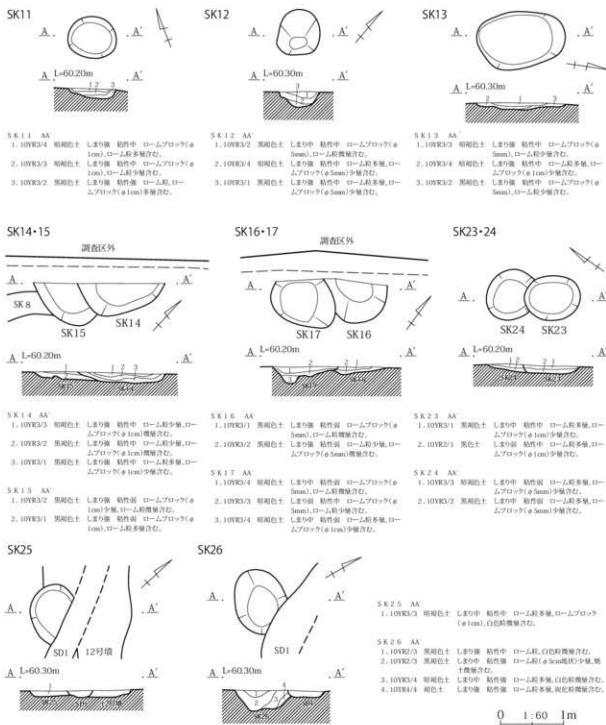
位置 調査区中央部北側。 **重複関係** 17号土坑と重複し、本遺構の方が古い。 **遺存状態** 西端部が17号土坑によって壊され、北西側は調査区外にある。 **覆土** 黒褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は円形を呈すると思われる。規模は104cm遺存×70cm遺存、確認面からの深さ12cmを測る。 **長軸方位** なし。 **壁面** 非常に緩やかに立ち上がる。 **底面** 南西側へ傾斜する。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

17号土坑（第15図、図版4）

位置 調査区中央部北側。 **重複関係** 16号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。 **遺存状態** 北西端部が調査区外にある。 **覆土** 暗褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸110cm、短軸89cm遺存、確認面からの深さ25cmを測る。 **長軸方位** N-89°-W。 **壁面** 北東側は緩やかに立ち上がり、その他は急角度で立ち上がる。 **底面** わずかな凹凸が見られるが、概ね平坦である。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

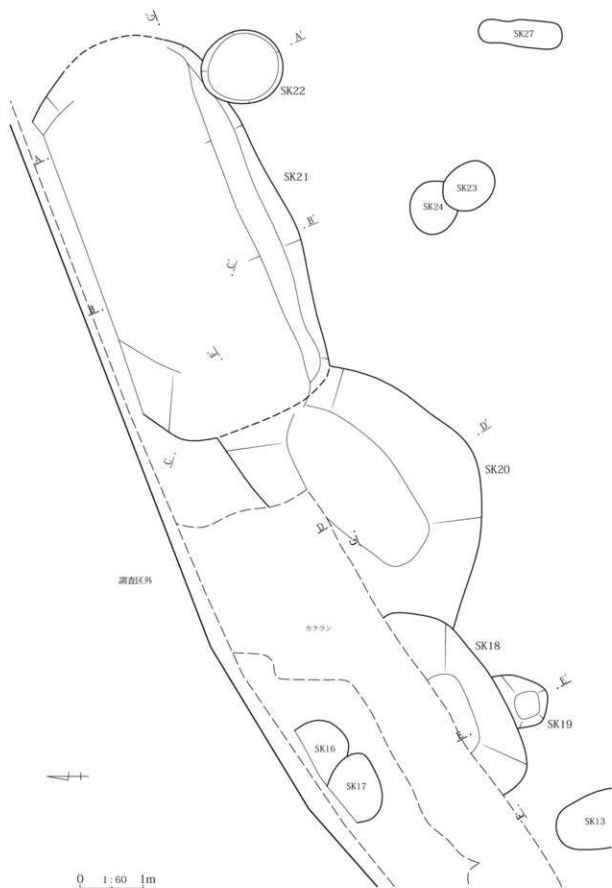
18号土坑（第16・17・19図、第2表、図版4・8）

位置 調査区中央部北側。 **重複関係** 19・20号土坑と重複し、本遺構が一番新しい。 **遺存状**

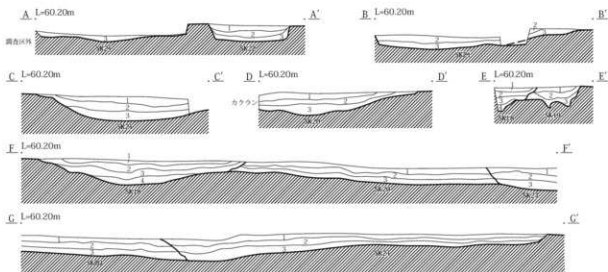


第 15 図 11～17・23～26 号土坑平面図・断面図

態 北西側がカクランによって壊されている。 **覆土** 上層は黒褐色土、下層は黒色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸 320cm、短軸 108cm 遺存、確認面からの深さ 37cm を測る。 **長軸方位** N-46°-E。 **壁面** 緩やかに傾斜する。 **底面** 概ね平坦である。 **遺物** 土師器、剥片が出土しそのうち土師器 3 点を図示し得た。 **備考** 本遺構は 20 号・21 号土坑と繋がった状態である。南側の遺構上場線が波打っており、その一波ごとを 1 つの土坑と捉えて調査を行ったが、本遺構と 20・21 号土坑と合わせて古墳の周堀であった可能性が高いと考えられる。



第16図 18～22号土坑平面図



SK18 群 群

1. 10YR3/4 黒褐色土 しまり中 粘質土 ローム層間層含む、厚(φ)3cmあり。
2. 10YR2/2 黒褐色土 しまり中 粘質土 ロームブロック(φ5mm)、ローム層間層含む、厚(φ)3cm、10cmあり。
3. 10YR2/3 黒褐色土 しまり中 粘質土 ロームブロック(φ1cm)、ローム層少量含む。
4. 10YR2/1 黒色土 しまり弱 粘質土 ロームブロック(φ1cm)多量、ローム層少量含む。

SK19 群

1. 10YR3/4 黒褐色土 しまり中 粘質土 ローム層間層含む。
2. 10YR3/3 黒褐色土 しまり中 粘質土 ロームブロック(φ1cm)少量、ローム層間層含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 しまり弱 粘質土 ローム層多量、ロームブロック(φ1cm)間層含む。

SK20 DD FF GG

1. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘質土 ロームブロック(φ15mm)、ローム層間層含む、厚(φ)事大あり。
2. 10YR2/3 黒褐色土 しまり強 粘質土 ローム層少量、ロームブロック(φ1cm)、厚(φ)15cm層間層含む、厚(φ)25cmあり。
3. 10YR3/1 黒褐色土 しまり強 粘質土 ローム層多量、ロームブロック(φ5mm)少量、白色層間層含む、厚(φ)人頭大あり。

SK21 AA BB CC FF GG

1. 10YR3/3 黒褐色土 しまり中 粘質土 ローム層少量、ロームブロック(φ5mm)間層含む、厚(φ)5cmあり。
2. 10YR3/4 黒褐色土 しまり中 粘質土 ローム層多量、厚(φ)事大)少量、ロームブロック(φ3cm)間層含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 しまり弱 粘質土 ローム層多量、ロームブロック(φ1cm)、白色層少量含む。

SK22 AA

1. 10YR3/2 黒褐色土 しまり中 粘質土 ローム層多量、ロームブロック(φ5mm)少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 しまり中 粘質土 ロームブロック(φ1cm)多量、ローム層少量含む。
3. 10YR2/1 黒色土 しまり強 粘質土 ローム層多量、ロームブロック(φ1cm)少量含む。

第17図 18～22号土坑断面図

19号土坑 (第16・17図、図版4)

位置 調査区中央部北側。 **重複関係** 18号土坑と重複し、本遺構の方が古い。 **遺存状態** 北端部が18号土坑によって壊されている。 **覆土** 暗褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸91cm遺存、短軸83cm、確認面からの深さ30cmを測る。 **長軸方位** N-6°-E。 **壁面** 北東側は緩やかに、その他の壁面は急角度で立ち上がる。 **底面** 小さい窪みが複数見られる。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

20号土坑 (第16・17・19図、第5表、図版5・8)

位置 調査区中央部北側。 **重複関係** 18・21号土坑と重複し、本遺構が一番古い。 **遺存状態** 西端部・東端部が18・21号土坑によって壊されている。また北西側がカクランによって壊されている。 **覆土** 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 不整楕円形を呈すると思われる。規模は長軸444cm遺存、短軸311cm遺存、確認面からの深さ35cmを測る。 **長軸方位** N-50°-E。 **壁面** 緩やかに立ち上がる。 **底面** 中央に向かって緩やかに傾斜する。 **遺物** 土師器、石器が出土した。そのうち石器3点を図示し得たが、本遺構の時期を示すものではない。 **備考** 本遺構は18・21号土坑と繋がった状態である。南側の遺構上場線が波打っており、その一波ごとを1つの土坑と捉えて調査を行ったが、本遺構と18・21号土坑と合わせて古墳の周堀であった可能性が高いと考えられる。

21号土坑（第16・17図、図版5）

位置 調査区中央部北側。**重複関係** 20・22号土坑と重複し、本遺構は22号土坑よりも古く、20号土坑よりも新しい。**遺存状態** 南東部の一部を22号土坑によって壊され、北西側は調査区外にある。また、短軸幅のほぼ中央に試掘坑が通っている。**覆土** 上層は暗褐色土、下層は黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸推定662cm、短軸335cm遺存、確認面からの深さ36cmを測る。**長軸方位** N-70°-E。**壁面** 緩やかに立ち上がる。**底面** 西側に向かって緩やかに傾斜する。**遺物** 土師器が出土したが、図示し得るものはなかった。**備考** 本遺構は18・20号土坑と繋がった状態である。南側の遺構上場線が波打っており、そのひと波ごとを1つの土坑と捉えて調査を行ったが、本遺構と18・20号土坑と合わせて古墳の周堀であった可能性が高いと考えられる。

22号土坑（第16・17図、図版5）

位置 調査区中央部北側。**重複関係** 21号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。**遺存状態** 良好。**覆土** 上層は黒褐色土、下層は黒色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は円形を呈する。規模は130cm×117cm、確認面からの深さ25cmを測る。**長軸方位** なし。**壁面** 東・南・西壁はほぼ垂直に、北壁は急角度で立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は平面形・断面形の形態からいわゆる円形土坑の可能性が考えられる。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

23号土坑（第15図、図版5）

位置 調査区中央部北側。**重複関係** 24号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。**遺存状態** 良好。**覆土** 上層は黒褐色土、下層は黒色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は円形を呈する。規模は78cm×73cm、確認面からの深さ12cmを測る。**長軸方位** なし。**壁面** 緩やかに立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

24号土坑（第15図、図版5）

位置 調査区中央部北側。**重複関係** 23号土坑と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態** 南東部が23号土坑によって壊されている。**覆土** 上層は暗褐色土、下層は黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は円形を呈する。規模は85cm×80cm、確認面からの深さ13cmを測る。**長軸方位** なし。**壁面** 非常に緩やかに立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

25号土坑（第15図、図版5）

位置 調査区中央部南側。**重複関係** 杉ノ根12号墳、1号溝跡と重複し、本遺構は1号溝跡より古く、杉ノ根12号墳より新しい。**遺存状態** 東端部が1号溝跡によって壊されている。**覆土** 暗褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸98cm遺存、

短軸 71cm遺存、確認面からの深さ 9cmを測る。**長軸方位** N-48°-W。**壁面** 急角度で立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は、古墳周堀を壊し近世と考えられる溝跡に切られていることから、古墳時代以降から近世の間となる。

26号土坑（第15図、図版5）

位置 調査区中央部南側。**重複関係** 1号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状況** 東端部が1号溝跡によって壊されている。**覆土** 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土・褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸 105cm遺存、短軸 85cm遺存、確認面からの深さ 33cmを測る。**長軸方位** N-83°-W。**壁面** 急角度で立ち上がる。**底面** わずかに凹凸が見られるが、概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は近世と考えられる溝跡に切られていることから、近世以前である。

27号土坑（第18図、図版5）

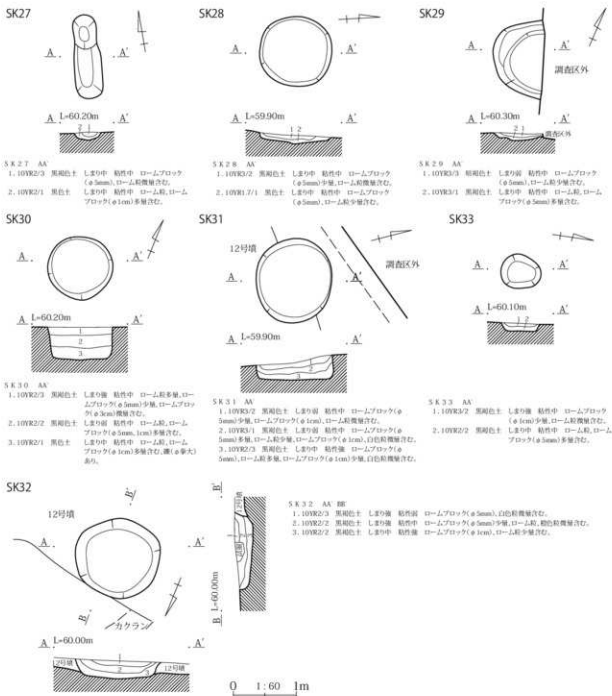
位置 調査区中央部北側。**重複関係** なし。**遺存状況** 良好。**覆土** 上層は黒褐色土、下層は黒色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸 134cm、短軸 45cm、確認面からの深さ 14cmを測る。**長軸方位** N-5°-E。**壁面** 緩やかに立ち上がる。**底面** 概ね平坦であるが、北端部が一段低くなる。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。

28号土坑（第18図、図版5）

位置 調査区中央部南側。**重複関係** 杉ノ根1号墳と重複し、本遺構の方が新しいと考える。**遺存状況** 上部がカクランによって壊されており、1号墳周堀の底面で確認した。**覆土** 上層は黒褐色土、下層は黒色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は円形を呈する。規模は117cm×115cm、確認面からの深さ 13cmを測る。**長軸方位** なし。**壁面** 北側は緩やかに、南側は急角度で立ち上がる。**底面** 中央に向かって緩やかに傾斜する。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は平面形・断面形の形態からいわゆる円形土坑の可能性が考えられる。帰属時期は出土遺物がないため性格は不明であるが、同様の形態の土坑（SK 31・32）が古墳の周堀より新しいことから、本遺構も古墳時代以降と判断した。

29号土坑（第18図、図版6）

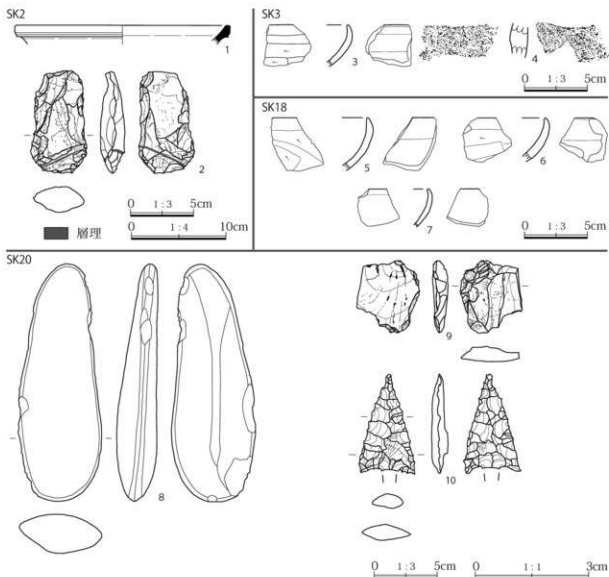
位置 調査区東部。**重複関係** なし。**遺存状況** 東半分が調査区外にある。**覆土** 上層は暗褐色土、下層は黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸 80cm遺存、短軸 124cm、確認面からの深さ 11cmを測る。**長軸方位** N-68°-E。**壁面** 緩やかに立ち上がる。**底面** 西側にテラスを有し、中央に向かって緩やかに傾斜する。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がないため不明である。



第18図 27～33号土坑平面図・断面図

30号土坑 (第18図、図版6)

位置 調査区中央南側。 **重複関係** なし。 **遺存状況** 良好。 **覆土** 上層は黒褐色土、下層は黒色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は円形を呈する。規模は103cm×102cm、確認面からの深さ52cmを測る。 **長軸方位** なし。 **壁面** ほぼ垂直に立ち上がる。 **底面** 概ね平坦である。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は平面形・断面形の形態からいわゆる円形土坑の可能性が考えられる。帰属時期は出土遺物がないため不明であるが、同様の土坑(SK31・32)が古墳の周堀よりも新しいことから、本遺構も古墳時代以降と考えられる。



第19図 土坑出土遺物実測図

31号土坑 (第18図、図版6)

位置 調査区東部。**重複関係** 杉ノ根12号墳と重複し、本遺構の方が新しい。**遺存状況** 良好。**覆土** 黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は円形を呈する。規模は132cm×130cm、確認面からの深さ38cmを測る。**長軸方位** なし。**壁面** ほぼ垂直に立ち上がり、北側はわずかに内傾する。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は平面形・断面形の形態からいわゆる円形土坑の可能性が考えられる。帰属時期は出土遺物がないため不明であるが、古墳の周堀よりも新しいことから、本遺構は古墳時代以降と考えられる。

32号土坑 (第18図、図版2・6)

位置 調査区東部。**重複関係** 杉ノ根12号墳と重複し、本遺構の方が新しい。**遺存状況** 良好。**覆土** 黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は円形を呈する。規模は135cm×128cm、確認面からの深さ29cmを測る。**長軸方位** なし。**壁面** 急角度で立ち上がる。**底面** 南側に緩やかに傾斜する。**遺物** 出土していない。**備考** 本遺構は平面形・断面形の形態からいわゆる

円形土坑の可能性が考えられる。帰属時期は出土遺物がないため不明であるが、古墳の周堀よりも新しいことから本遺構は古墳時代以降と考えられる。

33号土坑（第18図、図版6）

位置 調査区東部。**重複関係** なし。**遺存状況** 良好。**覆土** 黒褐色土が堆積する。**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸64cm、短軸55cm、確認面からの深さ12cmを測る。**長軸方位** N-3°-E。**壁面** 急角度で立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 土師器、須恵器が出土したが、図示し得るものはなかった。**備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。出土遺物はあるが時期の特定には至らないため、本遺構の帰属時期は不明である。しかし、周堀の内側にあることから古墳墳丘が壊された以降である可能性が高いと考えられる。

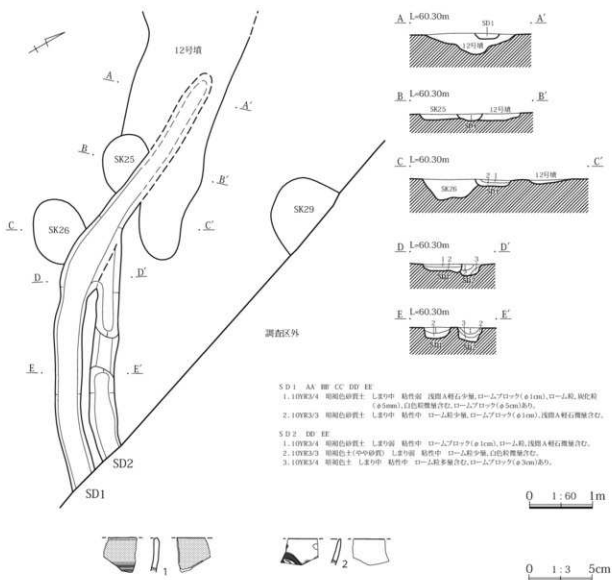
第4節 溝跡

1号溝跡（第20図、第2表、図版6・8）

位置 調査区東部。**重複関係** 杉ノ根12号墳、25・26号土坑、2号溝跡と重複し、本遺構が一番新しい。**遺存状態** 東側が調査区外にある。北端部は杉ノ根12号墳と重複しており、本遺構の方が浅いため杉ノ根12号墳の調査後は消失した。**覆土** 暗褐色砂質土が堆積する。**規模** 長さは直線距離で6.96mが確認され、上端幅は42～56cm、下端幅は31～40cm、確認面からの深さ7～12cmを測る。**主軸方位** 北側がN-27°-W、南側がN-57°-W。**遺物** 土師器、須恵器、陶磁器が出土し、そのうち陶磁器2点を図示し得た。**備考** 調査区東側で北東-南西方向へ緩やかに弧を描き、調査区外へ続く溝跡である。南側では東側に2号溝跡が並走しており、何らかの関係があるものと思われる。壁面は急角度で立ち上がる。底面の標高は北端部が60.05m、中央部が59.98m、南東部が59.98mで、南側がわずかに低いがほぼ水平である。本遺構は形態に特徴が見られないため性格不明の溝跡である。帰属時期は出土した陶磁器から近世と考えられる。

2号溝跡（第20図、図版6）

位置 調査区東部。**重複関係** 1号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態** 北端部が1号溝跡によって壊されている。**覆土** 上層は暗褐色砂質土、下層は暗褐色土が堆積する。**規模** 長さは直線距離で3.61m確認され、上端幅は36～46cm、下端幅は17～31cm、確認面からの深さ18～21cmを測る。**主軸方位** N-27°-W。**遺物** 出土していない。**備考** 調査区東側で北東-南西方向へ緩やかに弧を描き、調査区外へ続く溝跡である。西側に1号溝跡が並走しており、何らかの関係があるものと思われる。壁面は急角度で立ち上がる。底面の標高は北側が59.93m、南側が60.00mで、北側がわずかに低いがほぼ水平である。本遺構は形態に特徴が見られないため性格不明の溝跡である。帰属時期は出土遺物がないため不明であるが、1号溝跡と同時期の近世と考えられる。



第20図 1・2号溝跡平面図・断面図、1号溝跡出土遺物実測図

第5節 ビット

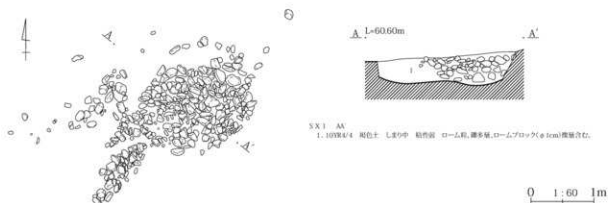
1号ビット (第4図)

位置 調査区西部。 **重複関係** なし。 **遺存状態** 良好。 **覆土** 上層は黒褐色土、下層は暗褐色土が堆積する。 **平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸54cm、短軸40cm、確認面からの深さ24cmを測る。 **長軸方位** N-49°-W。 **壁面** 東壁はほぼ垂直に、西壁は急角度で立ち上がる。 **底面** 概ね平坦である。 **遺物** 出土していない。 **備考** 本遺構は形態に特徴がないため性格は不明である。帰属時期は出土遺物がなかったため不明である。

第6節 性格不明遺構

1号性格不明遺構 (第21図)

調査区中央部南側の杉ノ根1号墳周堀内側の調査区境で、多量の礫が集積している状況が確認された。調査区西部で礫を並べた土壇墓(1号土坑)が確認されていたことから、墓壇の可能性を考性性格不明遺構として断ち割り調査を行った。断ち割りを行ってみた所、礫を意図的に置いた痕跡は見られず、雑然と入れ込んだ状態と判断した。古墳墳丘を削平した際に造られる「根切り溝」が確認されることから、近世以降に墳丘を削平した時に崩れ落ちた葺石を廃棄したものと考えられる。



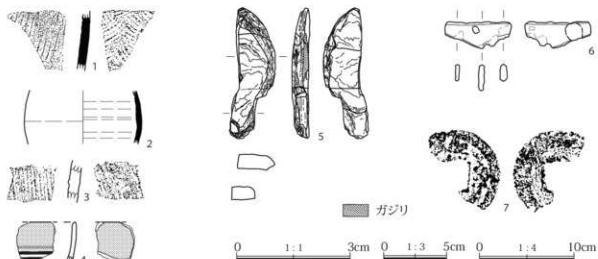
第21図 1号性格不明遺構平面図・断面図

第7節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (第22図、第2～5表、図版8)

遺構外からは土師器、須恵器、埴輪、陶磁器、石製品、金属製品が出土し、そのうち須恵器2点、埴輪1点、陶器1点、石製品1点、金属製品2点を第22図に図示した。

第22図1・2は須恵器である。2は小型壺で、外面に自然軸が付着している。3は埴輪で、透孔が確認された。4は陶器碗で、1号溝跡から出土したものと同一器種である。5は石製品である。刀子の様な形をしていることから石製模造品の未成品と思われる。6・7は金属製品である。6は形状から鉄製の刀子と考えられる。7は銭貨である。損傷が激しく、銘は判別できない。



第22図 遺構外出土遺物実測図

第6章 まとめ

今回の発掘調査では、古墳周堀3条、古墳周堀の一部と思われる土坑5基、中世後半の土壇墓1基、近世の溝跡2条、近世以降の性格不明遺構1基、時期不明の土坑27基、ピット1基が確認された。古墳時代を中心に本調査区及び周辺地域における様相をまとめたい。

古墳の周堀は、以前発掘調査が行われた1号墳の北側部分に加えて新たに11号墳の東側一部と12号墳の西側半分が確認され、杉ノ根地区の群集墳は全部で12基となった。1号墳はこれまで未確認であった周堀の北側が確認されたことで周堀の大きさが明らかとなった。周堀外周の南北長50m、東西長40m、墳丘裾部径30mの大型の円墳で、杉ノ根群集墳の中で一番規模が大きいことから核となる古墳である。本調査区では、1号墳と北西側で隣接する11号墳と北東側で隣接する12号墳が確認され、北側は隣接する18・20・21号土坑が古墳周堀の可能性が高いものである。過去の発掘調査では西側に隣接する4号墳、東側に隣接する8号墳が確認されており、1号墳の北側で10～15m規模の古墳が隣接する状況が確認された。南側は調査事例がないため未確認であるが、1号墳を中心として同規模の古墳が分布するものと思われる。さらに12号墳の北東側に3号墳が、4号墳の西側に9号墳があり、南西側に10号墳、南南東側に5号墳・6号墳、南東側に7号墳が弧を描くように分布し、3号墳の北東側には2号墳が隣接していることから二重・三重に古墳が巡る可能性がある。以上の様な状況が見えてきたことから、1号墳を核とした杉ノ根群集墳の様相がわずかながら明らかになったと思われる。

中世の遺構は、土壇墓1基が調査区西端部で確認された。本調査区内では他に土壇墓は確認されていないことから、墓域は東側には展開しないものと考えられる。

近世の遺構は溝跡2条が確認された。この他に1号墳の墳丘を掘削して平らな土地を増やす作業を行う際に残った墳丘から伸びる木の根を切るために掘られる「根切り溝」が確認され、墳丘を掘削した際に落ちた苔石と思われる礫を集めたと考えられる性格不明遺構1基がある。また、1号墳の周堀上部が後世の土地の改変を受け壊されており、その覆土に近世陶磁器が多く含まれていたことから、1号墳周辺の土地改変は近世以降の人々の活動に伴う痕跡と考えられる。本調査区では近世の活動の痕跡が見られるものの建物跡などが確認されていないことから、居住域（集落）は別の場所にあるものと思われる。

時期不明の遺構は、土坑27基、ピット1基が確認された。そのうち、22・28・30～32号土坑は形態からいわゆる円形土坑の可能性が考えられるものであり、その分布は本調査区の東側に集中していることが分かった。また、少量の縄文時代石器、ごく少量の弥生土器が出土した状況から、本調査区では遺構は確認されなかったが、縄文時代および弥生時代の人々の活動範囲内であったと考えられる。
(高林真人)

参考文献

- 本庄市教育委員会 1989 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第13集『旭・小島古墳群発掘調査報告書Ⅱ』
本庄市教育委員会 2008 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第11集『旭・小島古墳群—杉ノ根・屋敷内・三奈山・森西・森ノ下地区—』
本庄市教育委員会 2014 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第41集『旭・小島古墳群—下野堂二塚古墳の調査—』

第2表 出土土器・陶磁器観察表

[]:推定値 | |:現存額

神岡 番号	写真 図版	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
6 図 1	7	須恵器 甕	1号墳周 甕土	(16.7)	—	[4.6]	やや密	還元 焼成	灰色	外面:ロクロナデ。 内面:ロクロナデ。	口縁部 1/8
6 図 2	7	須恵器 甕	1号墳周 甕土	—	—	[6.4]	密	還元 焼成	褐色	外面:斜位・縦位ハケメ、タタキメあるか。自然 釉付着。 内面:同心円状当て具痕。	胴部破片
6 図 3	—	須恵器 甕	1号墳周 甕土	—	—	[5.9]	密	還元 焼成	灰白色	外面:斜位平行タタキメ。 内面:同心円状当て 具痕。	胴部破片
6 図 4	7	須恵器 甕	1号墳周 甕土	—	—	[8.2]	密	還元 焼成	黒褐色	外面:横位・斜位ハケメ、タタキメか。自然釉付着か。 内面:同心円状当て具痕。	胴部破片
6 図 5	7	須恵器 甕	1号墳周 甕土	—	—	[6.4]	密	還元 焼成	にぶい 褐色	外面:籠状タタキメ。 内面:同心円状当て具痕。	胴部破片
6 図 8	7	赤生土器 甕	1号墳周 甕土	—	—	[2.0]	やや密	良	にぶい 黄褐色	外面:ナデ、横位沈線、LR単筋縄文。 内面:ナデ。	胴部破片
6 図 9	7	陶器 天目茶碗	1号墳周 甕土	(10.8)	—	[3.6]	密	良好	黒褐色	外面:ロクロナデ。全面鉄軸筋輪。 内面:ロク ロナデ。全面鉄軸筋輪。	口縁部~一部 1/8
6 図 10	7	陶器 碗	1号墳周 甕土	—	—	[2.3]	密	良好	灰白色	外面:ロクロ整形、白色軸筋輪。 内面:ロクロ整形、 白色軸筋輪。蓋戸・美濃産。	上縁部破片
6 図 11	7	陶器 碗	1号墳周 甕土	—	—	[2.2]	密	良好	灰白色	外面:ロクロ整形、透明軸筋輪。 内面:ロクロ整形、 透明軸筋輪。	口縁部破片
6 図 12	—	染付 皿	1号墳周 甕土	—	(5.8)	[1.2]	密	良好	白色	外面:無文。 内面:底部外縁二重割線。見込み不明。	底部 1/8
6 図 13	—	陶器 碗	1号墳周 甕土	—	(4.2)	[2.8]	密	良好	黒褐色	外面:凹縁ヘラケズリ。高台部を除いて全面鉄 軸筋。高台部削り出しか。 内面:ロクロ整形。 白みがかった透明軸筋輪。蓋戸・美濃産。	体下部~下部 1/4
6 図 14	7	陶器 碗	1号墳周 甕土	—	(4.0)	[2.3]	密	良好	褐色	外面:凹縁ヘラケズリか。高台部を除いて全面鉄 軸筋。高台部削り出しか。 内面:ロクロ整形。 赤みがかった透明軸筋輪。蓋戸・美濃産。	体下部~高台部 1/4
9 図 1	7	須恵器 甕	11号墳周 甕土	—	—	[5.9]	やや密	還元 焼成	にぶい 赤褐色	外面:平行タタキメ。 内面:同心円状当て具痕。	胴部破片
10 図 1	—	土師器 杯	12号墳周 甕土	—	—	[4.2]	密	良好	褐色	外面:口縁部ヨコナデ。体部斜位ヘラナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデか。	口縁部~一部 破片
10 図 2	7	土師器 杯	12号墳周 甕土	(12.0)	—	[4.0]	密	良好	褐色	外面:口縁部ヨコナデ。体部横位・斜位ヘラケズリ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部横位ヘラナデ。	口縁部~一部 1/3
10 図 3	—	土師器 杯	12号墳周 甕土	(11.8)	—	[3.0]	密	良	褐色	外面:口縁部ヨコナデ。体部横位ヘラナデ。 内面: 口縁部~一部ヨコナデ。	口縁部~一部 1/5
10 図 4	7	土師器 杯	12号墳周 甕土	(12.0)	—	[2.7]	やや密	良好	にぶい 褐色	外面:口縁部ヨコナデ。体上部ナデ。体下部斜位 ヘラケズリ。 内面:口縁部~一部ナデ。一部斜 位ヘラナデ。	口縁部~一部 1/4
10 図 5	—	土師器 杯	12号墳周 甕土	(11.4)	—	[2.4]	密	良	褐色	外面:磨減激しく調整不明。体下部ヘラナデか。 内面:磨減激しく調整不明。	口縁部~一部 1/5
10 図 6	7	土師器 杯	12号墳周 甕土	(11.7)	—	[3.2]	密	良	褐色	外面:口縁部ヨコナデ。体部斜位ヘラナデ。 内面: 口縁部~一部ヨコナデ後一部斜位ヘラナデ。	口縁部~一部 1/5
10 図 7	7	土師器 杯	12号墳周 甕土	—	(7.2)	[1.1]	密	良好	褐色	外面:体下部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。 内面: 体下部ヨコナデ。底部横位ヘラナデ。	体下部~底部 1/3
10 図 8	7	須恵器 甕	12号墳周 甕土	(22.6)	—	[9.2]	密	還元 焼成	黄灰色	外面:口縁部ロクロナデ。頸部~肩部縦状タタキ メ後肩部横位力カキメ。 内面:口縁部~肩部ロク ロナデ。肩部同心円状当て具痕。	口縁部~肩部 1/4
10 図 9	8	須恵器 甕	12号墳周 甕土	(20.8)	—	[32.9]	やや粗	還元 焼成	灰白色	外面:口縁部2条横位沈線。頸部格子状タタキメ 後ロクロナデ・ナデ。肩部格子状タタキメ後横位 力カキメ。胴部格子状タタキメ。 内面:口縁部~ 肩部ロクロナデ・ナデ。胴部同心円状当て具痕。	口縁部~肩部 1/3 胴部 3/4
10 図 10	—	須恵器 甕	12号墳周 甕土	—	—	[6.7]	密	還元 焼成	にぶい 褐色	外面:籠状タタキメ。 内面:同心円状当て具痕。	胴部破片
19 図 1	8	須恵器 甕	S K 2 甕土	(23.4)	—	[2.1]	密	還元 焼成	黒褐色	外面:ロクロナデ。自然釉付着か。 内面:ロク ロナデ。自然釉付着。	口縁部破片
19 図 3	8	土師器 杯	S K 3 甕土	—	—	[3.3]	やや密	良	褐色	外面:口縁部ヨコナデ。体上部ナデ。横位ヘラケ ズリ。 内面:口縁部~台上部ヨコナデ。	口縁部~一部 破片
19 図 5	—	土師器 杯	S K 18 甕土	—	—	[3.3]	やや密	不良	褐色	外面:磨減激しく調整不明。 内面:磨減激しく 調整不明。	口縁部~一部 破片
19 図 6	8	土師器 杯	S K 18 甕土	—	—	[3.5]	やや密	良	褐色	外面:口縁部ヨコナデ。体部横位・斜位ヘラケズリ。 内面:口縁部~一部ヨコナデ。	口縁部~一部 破片
19 図 7	8	土師器 杯	S K 18 甕土	—	—	[3.0]	密	不良	褐色	外面:磨減激しく調整不明。 内面:磨減激しく 調整不明。	口縁部~一部 破片

図号 番号	写真 図版	器種	出土位置	口径 cm	底径 cm	器高 cm	胎土	焼成	色調	成・整形、文様などの特徴	遺存状況
20 図 1	8	陶器 碗	1号溝跡 覆土	—	—	[2.7]	密	良好	灰白色	外面：ロクロ整形、体部傾位沈線、体部鉄輪軸輪 後口縁部に白みがかった透明輪軸輪。 内面：ロ クロ整形、白みがかった透明輪軸輪。22 図4と同 一器種、瀬戸・美濃産。	口縁部～体部 破片
20 図 2	8	染付 碗	1号溝跡 覆土	—	—	[2.1]	密	良好	白色	外面：不明、草木文か。 内面：無文。	口縁部破片
22 図 1	—	面取器 蓋	遺構外	—	—	[4.7]	密	酸化 緑褐色	にぶい 褐色	外面：蓋状タタキメ。 内面：同心円状当て具痕。	胴部破片
22 図 2	8	須恵器 小型壺	遺構外	—	—	[5.6]	密	還元 焙焼成	灰オリーブ 色	外面：ロクロナデ、自然釉付着。 内面：ロクロナデ。	胴部 1/8
22 図 4	—	陶器 碗	遺構外	—	—	[3.1]	密	良好	灰白色	外面：ロクロ整形、体部傾位沈線、体部鉄輪軸輪 後口縁部透明輪軸輪。 内面：ロクロ整形、透明 輪軸輪。20 図1と同一器種、瀬戸・美濃産。	口縁部～体部 破片

第3表 出土埴輪観察表

図号 番号	写真 図版	器種	出土位置	A：法量 単位cm ()は推定 B：成形 C：整形・調整 D：胎土・材質 E：色調 F：残存度 G：備考
6 図 6	7	円筒埴輪	1号墳周埋覆土	A：遺存高4.8 B：粘土組織み上げ C：外面縦位ハケメ 内面縦位・縦位ハケメ D：砂粒、礫(φ3mm) E：褐色 F：口縁部破片
6 図 7	—	円筒埴輪	1号墳周埋覆土	A：遺存高6.5 B：粘土組織み上げ C：外面縦位ハケメ 内面縦位・横位ヘラナデ、斜位・横位ハケメ D： 砂粒 E：にぶい黄褐色 F：胴部破片
10 図 11	—	円筒埴輪	12号墳周埋覆土	A：遺存高2.8 B：粘土組織み上げ C：外面斜位ハケメ 内面斜位ハケメ D：砂粒 E：にぶい赤褐色 F： 胴部破片
19 図 4	—	円筒埴輪	S K 3 覆土	A：遺存高2.7 B：粘土組織み上げ C：外面ナデ 内面斜位ヘラケズリ、ナデ D：砂粒、礫(φ3mm) E： にぶい黄褐色 F：胴部破片
22 図 3	8	円筒埴輪	遺構外	A：遺存高3.3 B：粘土組織み上げ、透孔穿孔 C：外面縦位ハケメ 内面ナデ E：褐色 F：胴部破片

第4表 出土鉄製品観察表

図号 番号	写真 図版	器種	出土位置	A：法量 単位cm・g ()は推定 B：成形 C：整形・調整 D：胎土・材質 E：色調 F：残存度 G：備考
6 図 15	7	鍔洋	1号墳周埋覆土	A：長さ6.3 幅3.3 厚さ1.7 重さ43.2 F：完存 G：鍔相洋と思われる。
22 図 6	8	板状鉄製品	遺構外	A：長さ5.3 遺存 幅2.1 厚さ0.5 重さ8.4 F：先端及び基部欠損 G：刀子か
22 図 7	—	鏡筒	遺構外	A：長さ2.2 遺存 幅1.9 遺存 厚さ0.1 重さ1.5 F：2/3 C：鏡筒は判別不能

第5表 出土石製品観察表

図号 番号	写真 図版	器種	出土位置	A：法量 単位cm・g B：成形 C：整形・調整 D：胎土・材質 E：色調 F：残存度 G：備考
6 図 16	7	測片	1号墳周埋覆土	A：長さ7.3 幅6.4 厚さ2.0 重さ75.3 C：側面に刃部状の加工痕 D：安山岩 E：灰白色 F： 完存 G：使用痕のある測片石部
9 図 2	—	測片	11号墳周埋覆土	A：長さ4.2 幅5.7 厚さ1.5 重さ19.5 D：安山岩 E：灰色 F：完存 G：使用痕のある測片 石部
10 図 12	7	打製石斧	12号墳周埋覆土	A：長さ10.4 幅6.8 厚さ1.6 重さ69.2 D：安山岩 E：黄灰色 F：一部欠損 G：分銅形打製 石斧
19 図 2	8	打製石斧	S K 2 覆土	A：長さ8.0 幅4.4 厚さ1.9 重さ74.5 D：安山岩 E：灰色 F：完存
19 図 8	8	磨製石斧か	S K 20 覆土	A：長さ18.8 幅6.7 厚さ3.1 重さ469.7 C：端部に磨痕が見られる D：安山岩 E：緑灰色 F： 一部欠損
19 図 9	8	測片	S K 20 覆土	A：長さ5.8 幅4.9 厚さ1.2 重さ32.4 B：上部に打点が残る D：安山岩 E：黄褐色 F：完存 G： 使用痕のある測片
19 図 10	8	打製石鏃	S K 20 覆土	A：長さ2.6 遺存 幅1.5 厚さ0.4 重さ1.0 D：頁岩か E：灰白色 F：基部欠損
22 図 5	8	石製製造品か	遺構外	A：長さ10.4 幅3.0 厚さ1.1 重さ51.7 D：蛇紋岩か E：灰白色、内部はオリーブ灰色 F：完 存 G：刀子形をしており、石製製造品の未成品か

写 真 图 版



調査地点全景



調査地点全景 東から



杉ノ根1号墳周堀土層断面 CC' 南東から



杉ノ根1号墳周堀全景 東から



杉ノ根1号墳周堀全景 北から



杉ノ根11号墳周堀土層断面 AA' 南から



杉ノ根11号墳全景 北から



杉ノ根12号墳周堀・SK32土層断面 AA' 北西から



杉ノ根12号墳周堀全景 北東から



杉ノ根12号墳周堀全景 南西から



杉ノ根 12号墳周堀遺物出土状況 南東から



杉ノ根 12号墳周堀遺物出土状況 北西から



SK1 礎出土状況 南から



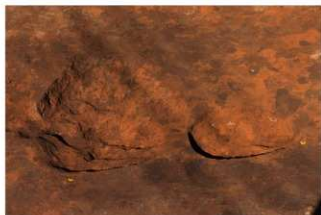
SK1 人骨出土状況 南から



SK1 全景 南から



SK2・3 全景 北東から



SK4・5 全景 南東から



SK6・7 全景 北東から



SK8・9 全景 北東から



SK10 全景 南西から



SK11 全景 南西から



SK12 全景 南東から



SK13 全景 北東から



SK14・15 全景 南東から



SK16・17 全景 南東から



SK18・19 全景 南東から



SK20 全景 南東から



SK21 全景 北東から



SK22 全景 南東から



SK23・24 全景 南西から



SK25 全景 北西から



SK26 全景 北西から



SK27 全景 南から



SK28 全景 東から



SK29 全景 北西から



SK30 全景 北西から



SK31 全景 東から



SK32 全景 東から



SK33 全景 北東から



SD1・2 全景 南東から



作業風景



作業風景

1号墳



11号墳



図版 8

12号墳



10 図 9

SK2



19 図 1



19 図 2

SK3



19 図 3

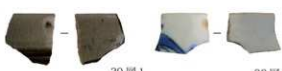
SK18



19 図 6

19 図 7

SD1



20 図 1

20 図 2

SK20



19 図 8



19 図 9



19 図 10

遺構外



22 図 2



22 図 3



22 図 5



22 図 6

報告書抄録

ふりがな	あさひ・おしまこふんぐん 18 すぎのねちくだいいちちてんのちょうさ							
書名	旭・小島古墳群XⅧ							
副書名	杉ノ根地区第1地点の調査							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第63集							
編著者名	高林 真人 和田 祐作							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	令和2年3月19日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)	(世界測地系)		(㎡)	
旭・小島古墳群 杉ノ根地区 第1地点	埼玉県本庄市 下野堂3丁目 2番	112119	53-171	36° 15' 6"	139° 9' 29"	2019.10.01 ～ 2019.11.07	880	分譲住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳群 杉ノ根地区 第1地点	古墳	古墳時代終末期		古墳周堀 土坑	3条 5基	土師器・須恵器・埴輪 土師器・須恵器・石器		古墳周堀と 思われる 人骨出土
	築城	中世		土壇墓	1基			
	集落跡	近世		溝跡 性格不明遺構	2条 1基	陶磁器 陶磁器		
		時期不明		土坑 ピット	27基 1基			

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第63集

旭・小島古墳群 XⅧ

—杉ノ根地区第1地点の調査—

令和2年3月19日 印刷

令和2年3月19日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／上毎印刷工業株式会社